

第1節 幼稚園教育要領改訂の要点

1 学習指導要領、幼稚園教育要領の改訂の要点

(1) 今回の改訂の基本的な考え方

- 子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力の一層確実な育成と、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」の実現
- 知識の理解の質をさらに高めた確かな学力の育成
- 道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実による豊かな心や健やかな体の育成

(2) 知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」

- 育成を目指す資質・能力の明確化
知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理した。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

(3) 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進

- 学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のための、教科等横断的な学習の充実
- 「主体的・対話的で深い学び」の充実に向けた、単元や題材など内容や時間のまとまりにおける、習得・活用・探究のバランスの工夫
- 学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るためのカリキュラム・マネジメントの確立

(4) 教育内容の主な改善事項

- 言語能力の確実な育成
- 理数教育の充実
- 伝統や文化に関する教育の充実
- 体験活動の充実
- 外国語教育の充実
- 情報活用能力の育成
- 現代的課題への対応

2 幼稚園教育要領総則の改訂の要点

(1) 幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化

(幼稚園教育要領：第1章第2の1及び2)

第1章 幼稚園教育における指導と評価

第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- 1 幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。
 - (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
 - (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
 - (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」
- 2 1に示す資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。

(2) 小学校教育との円滑な接続の一層の強化

(幼稚園教育要領：第1章第2の3)

- 3 次に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。

※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、次節参照

(幼稚園教育要領：第1章第3の5)

5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。
- (2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

(3) カリキュラム・マネジメントの実施

(幼稚園教育要領：第1章第3の1)

第3 教育課程の役割と編成等

1 教育課程の役割

各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。

また、各幼稚園においては、6に示す全体的な計画にも留意しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通し

第1章 幼稚園教育における指導と評価

て、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

（幼稚園教育要領：第1章第3の6）

6 全体的な計画の作成

各幼稚園においては、教育課程を中心に、第3章に示す教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画、学校保健計画、学校安全計画などとの関連させ、一体的に教育活動が展開されるよう全体的な計画を作成するものとする。

(4) 指導計画作成上の留意事項の充実

（幼稚園教育要領：第1章第4の3参照）

- 主体的・対話的で深い学びの実現
- 言語活動の充実
- 遊びや生活の中での見通しや振り返りの工夫
- 視聴覚教材やコンピュータなど情報機器の活用 等

(5) 幼児理解に基づいた評価の実施

（幼稚園教育要領：第1章第4の4参照）

- 幼児理解に基づいた指導の改善
- 評価の妥当性や信頼性が高められるような創意工夫
- 次年度や小学校等への適切な引継ぎ

(6) 特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実

（幼稚園教育要領：第1章第5参照）

- 障害のある幼児などへの指導
 - ・組織的かつ計画的な、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫
 - ・個別の教育支援計画、個別の指導計画を活用した教育的支援
- 海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児の幼稚園生活への適応
 - ・組織的かつ計画的な、個々の幼児の実態に応じた指導内容や指導方法の工夫

第2節 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5領域の「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。

ア 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

イ 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

ウ 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

エ 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

オ 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

カ 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

キ 自然との関わり・生命尊重

第1章 幼稚園教育における指導と評価

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちかえりをもって関わるようになる。

ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

ケ 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

コ 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

第3節 評価の基本的な考え方

1 評価の基本的な考え方

評価は、「幼児の発達の理解」と「教師の指導の改善」の両面から行われるものである。保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めるものである。

評価の実施に当たっては、指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすることが重要である。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意する必要がある。

(1) 保育のプロセスと評価

幼稚園教育指導資料第3集「幼児理解と評価」（平成31年3月改訂・文部科学省）では、幼稚園の保育は一般的に次のようなプロセスで進められるとしている。

- 1 幼児の姿から、ねらいと内容を設定する。
- 2 ねらいと内容に基づいて環境を構成する。
- 3 幼児が環境に関わって活動を展開する。
- 4 活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助を行う。

具体的な保育は、この1～4の循環で、幼児の活動と経験を予想した指導計画を立てて行われるが、計画は一つの仮説であること、実際の幼児の生活する姿に応じて、これらの全ての点について適切かどうかを検討しながら改善すべきである。

評価は、上枠内1～4のそれぞれについて、「幼児の理解は適切であったか」「あらかじめ教師が設定した指導の具体的なねらいや内容は妥当なものであったか」「環境の構成はふさわしいものであったか」「教師の関わり方は適切であったか」などについて、評価をすることである。

評価は常にそのための時間を取って行わなければならないというわけではなく、日常的な振り返りも保育の改善に必要なものである。一日の保育の後に、教師が今日の生活の流れや、個々の幼児の姿を思い返し、教師の援助について振り返ったり、環境の構成について考えたりすることも評価である。つまり、日々の保育と評価は常に一体になっているものであり、ごく日常的なことであるといえることができる。

(2) 評価の妥当性と信頼性を高めるための創意工夫

各園には、評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進することが求められる。評価に関する園における取組の工夫としては、次のようなことが挙げられる。

- 1 参考となる情報（日々の記録、エピソード、写真など）を生かしながら評価を行う。
- 2 複数の教職員で、それぞれの判断の根拠となっている考え方を突き合わせ、幼児のよさを捉える。
- 3 評価に関する園内研修を行う。
- 4 日頃から保護者に伝え、家庭との連携に留意する。

第1章 幼稚園教育における指導と評価

一人の教師の目に映った幼児の姿は、それぞれの幼児のごく一部である。また、教師自身の見方や考え方によって、その姿の見え方は違ってくる。幼児の姿をより多面的に捉えるためには、複数の教師が連携・協力し、多くの目を見たことを重ね合わせていくことが必要である。

(3) 短期・長期の指導計画の評価と工夫改善

○ 短期の指導計画の評価と工夫改善

各園では、毎日の指導計画（日案）を作成して、それに基づいて保育を展開している。また、一日の保育の終了後には、保育を振り返り、幼児の姿や教師の指導の評価を行っている。その際、視点をもって行うことにより、幼児の姿や指導の在り方をより具体的に捉え、見直すことができる。

短期の指導計画を見直す視点は、先に挙げた通り、「幼児理解」「指導のねらいや内容の妥当性」「環境の構成」「教師の関わり方」等であり、これについて評価することが必要である。

○ 長期の指導計画の評価と工夫改善

長期の指導計画は、それぞれの園の教育課程に沿って幼児の生活全体を長期的に見通した、年・学期・月などの指導計画である。

長期の指導計画の改善については、日々の保育の実践における評価、累積された記録などを生かして、各園における幼児の発達の過程を見極めて行うものである。さらに、保護者からのアンケートや学校評価も参考にしていきたい。

また、長期の指導計画を見直す視点としては、短期の指導計画を見直す視点として示したものに加えて、入園・進級時など幼児の生活の変化に配慮を要する時期や行事等との関係に対する配慮が考えられる。

2 教育課程の評価・改善

教育課程編成と実施における評価は、各園の教育目標達成のために編成される教育課程及びそれに基づく実施状況が適切であったか否かを確認するためのものである。言い換えれば、教育課程に基づいて作成された長期・短期の指導計画とそれに沿って実践された日々の保育の結果とを相互にフィードバックさせつつ、教育課程の妥当性を吟味し、必要に応じてその修正・再構成を図るために取り組むものである。その際には、学校評価を活用したい。

教育課程の編成と実施の評価の観点として、次の5点が挙げられる。

- | |
|--------------------|
| 1 教育課程の編成と基本 |
| 2 教育内容の取扱い |
| 3 園の経営 |
| 4 家庭や地域社会及び小学校との連携 |
| 5 特に留意する事項 |

これらについて収集した評価の資料を整理し、全教職員が協力して定期的に教育課程の改善を行うことが必要である。

埼玉県幼稚園教育課程指導実践事例作成協力委員

委員 (◎は部会長、○は副部会長。委員は五十音順)

| | |
|------------|-------------------|
| ◎栗原 敏枝 | 熊谷市立妻沼南小学校 校長 |
| ○関山 典央 | 杉の子幼稚園 理事長・園長 |
| 飯田 宏美 | 加須市教育委員会 主査・指導主事 |
| 遠藤 悦子 | 杉戸町立すぎと幼稚園 主任教諭 |
| オブライアン 菜穂子 | 川口市立南平幼稚園 教諭 |
| 織原 由美子 | 妙巖寺幼稚園 園長 |
| 加藤 薫 | 狭山市立入間川幼稚園 主査・教諭 |
| 栗原 充常 | 牛島幼稚園 副園長 |
| 坂坊 乃吏代 | 加須市立三俣幼稚園 副園長 |
| 佐藤 緑郎 | 大宮みどりが丘幼稚園 理事長・園長 |
| 谷畑 工 | 新所沢こひつじ幼稚園 理事長・園長 |
| 筒井 佐知子 | 川口市立舟戸幼稚園 教諭 |
| 濱川 美由紀 | 深谷市立幡羅幼稚園 教諭 |
| 平柳 舞 | 埼玉大学教育学部附属幼稚園 教諭 |
| 若盛 正城 | 認定こども園こどものもり 理事長 |

監修

寺藺 さおり 埼玉大学教育学部 准教授

事務局

八田 聡史 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課長
吉田 元 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課教育指導幹
高野 桂子 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課主任指導主事
篠田 かなえ 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事

第1節 見通しをもって行動する

幼児が生活に入ったとき、戸惑いの中で試行錯誤を繰り返しながら、生活に必要な行動を一つ一つ獲得していく。友達や教師と関わりをもつ中で、それぞれの家庭で獲得された生活習慣を社会的に広がりのあるものとして再構成し、自立心や協同性、また規範意識を持てるような配慮が教師にとって大切なこととなる。

その上で、幼児の活動が、幼児の必要感に基づき、自発的に展開されるものであれば、幼児の意識の中でつながりが芽生え、幼稚園生活の大まかな予測をもてるようになり、次第に生活に必要な行動について見通しをもち、自立的に行動できるようになっていく。

幼児自身の意識によって少しずつ生活習慣を身につけられるようになり、次第に見通しをもって行動することができるよう、幼稚園生活全体を楽しく、脈絡のあるものとするのが大切である。

ここでは、3年保育3歳児の事例1「一緒に歌おうね」から次の活動へ期待を持って楽しみながら参加する姿、事例2「サメがやりたいんだ」から、幼児が、課題をどのように解決したらよいのかを考え、自立した行動をしようとする姿を取り上げる。

(関連資料:「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」(平成31年3月埼玉県教育委員会)
P48～P51)

1 幼児の実態 (3、4、5歳児混合クラス 35名)

3歳児は、入園当初は、保育室や園庭にあるもの全てに興味を示し、自分のやりたいことを優先して行っている。また、朝の身支度では片付けをしないで、脱いだ服はそのまま散らかした状態で園庭に行き、遊んでいる様子が見られた。

一方、年長児が率先して着替えや片付けを手伝う姿を見て、制服から体操着に着替えることが分かり、自主的に行おうとする幼児もいる。

2 指導のねらい

- ・幼稚園生活に必要な習慣や行動を繰り返す中で、みんなと一緒に行動する心地よさや満足感を味わう。(事例1 3歳児)
- ・集団における行動を楽しむためには、一人一人がどのように活動すればよいのかを友達と考え、自分の力でやり遂げる充実感を味わう。(事例2 3歳児)

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3(3)「協同性」]

- ・友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合

いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (4)「道徳性・規範意識の芽生え」]

- ・身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (2)「自立心」]

4 内容

- ・教師や友達と一緒に歌うことの楽しさを味わう。(事例1)
- ・運動会の練習で困っていることを友達と伝え合い、一緒に考えながらクラス全体の活動に取り組む。(事例2)

5 環境構成のポイント

- ・「明日は一緒に歌おうね。」と教師が声をかけ、クラスの友達と互いに約束をすることで、期待と見通しが持てるようにする。(事例1)
- ・歌うことを好む幼児達であるので、楽しく歌ったことを十分に称賛する。(事例1)
- ・発表の際の立ち位置にシールを貼り、集合の際に戸惑わないよう配慮する。(事例1)
- ・幼児が自ら考えながら練習ができるように、トラックのどの場所を走るのかを黒板の図などで説明し、確認をしてから練習を行う。(事例2)
- ・クラスの子供が心をついにし、先を見通して、期待感をもって練習に参加できるよう、カレンダーを使うなどして気持ちを高めるよう工夫する。(事例2)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 「一緒に歌おうね」(4月)

教師「お歌の練習をします。並んでください。」

幼児は立ち位置に貼られたシールに沿って並ぶ。

A児(3歳児)「わたしどこに並ぶのかわからないよ。」

B児(5歳児)「Aちゃんの前は私だよ。」

C児(5歳児)「Aちゃんの後ろはぼくだよ。」

D児(5歳児)「年少さんの並び順は前の列だからね。」

A児は自分の位置に立つ。子供同士の自己紹介が始まる。

A児も少し安心した表情になり、楽しみながら歌うことができた様子である。

教師「Aちゃん、お友達と一緒に歌えたね。楽しかったね。」

A児「また明日もお歌の練習ある？」

教師「お弁当を食べた後に練習しようね。」

A児「うん、がんばるよ。」

次の日、お弁当を準備していると、A児は歌を歌うときに隣に並ぶ友達のところへ行き、お弁当と一緒に食べていた。

A児は「みんな、この後はお歌を歌うからね。」と、クラスの友達に伝え、自分の位置

に一番に並ぶことができていた。

○事例1に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

歌をうたったり、表現したりすることを好む幼児が多く、共に表現することの楽しさを味わえるような声掛けを多くし、意欲を高めた。それによって、「また、明日も歌いたい」という気持ちで、見通しをもった言動が見られたと考えられる。

(環境構成、教師の援助)

事前に「ご飯の後はお歌の練習だよ。」と伝えたり、生活の流れに沿った活動になるように毎日同じような時間に練習を行ったりするなど、見通しがもてるように配慮した。

また、並ぶ位置に目印のシールを貼り、幼児が入場の際に自分の場所がわかりやすいようにした結果、友達同士で声を掛け合い、助け合う姿も見られた。この関わりが、「友達と歌うと楽しい」という意識を高めていた。

(2) 事例2 「サメがやりたいんだ」(9月)

2学期になり、運動会に向けての活動を始める。年長児を中心に全園児で行う野外劇「スイミー」の話合いをし、海の生き物を体で表現したり、側転や馬跳びを練習したりしている。

E児はサメ役を希望し「ぼくは力持ちだから大丈夫だよ。」と前向きな気持ちでいた。

しかし、野外劇の練習が始まると、友達に気を取られたり、砂あそびをして自分の出番に出遅れてしまったりする姿が、E児をはじめ、他の幼児にも見られた。

教師「サメさん、出番に遅れちゃうね。」

E児「ぼく、いつも遅れちゃうんだ。」

教師「どうしたらいいかなあ。」

F児「ぼくは、数を数えて遅れないようにするね。」

教師「いいアイデアだね。」

G児「魚の役の次だから、よく見ていたら大丈夫だよ。」

E児「うん、やってみるよ。」

次の日、魚の役の出番になると、E児は顔を上げて、サメ役の準備をしている姿が見られた。その姿に気づいたF児とG児は、視線を合わせ頷いていた。

翌日からは自分の出番の前になると、サメ役の準備をすることができた。

また、本番でもE児は「1・2・3・4・5…」と数を数えてから振り返り、全力で走り切ることができた。

○事例2に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

A児は練習をしたい気持ちはあったが、出番に遅れてしまうことが続いた。教師の声掛けにより、自分から不安なことを言葉で伝え、友達からの一言をきっかけに練習

へ参加する意識が芽生え始めた。E児は自分の出番の前後の役を覚え、友達の協力を得て、遅れることなく自分の役割の準備することができた。

友達と声を掛け合ったり、力を合わせたりしながら、自分たちでどうしたらよいかを考え必要感を感じながら、見通しをもって行動し、不安を乗り越えることができた。

(環境構成、教師の援助)

幼児が困っていることを自分の言葉で伝える場を、教師が設けることにより、友達と一緒に考えたり、練習方法を工夫したりすることにつながった。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

- ・運動会の野外劇「スイミー」の練習を通して、困っている友達を助けようとしたり、友達の意見に耳を傾け困難を乗り越えたりする幼児の姿が見られた。活動する姿を具体的に認める声掛けをすることで、さらに意欲を高め、見通しのもった活動を、自信をもって行えるようにしたい。(事例2)
- ・練習中、教師が、友達の行動にも注目できるような声掛けを行う必要があった。事前や練習の過程において、いろいろな役がそれぞれの役割を果たすことや、協力してやり遂げる重要性等、幼児の気づきを促す場の設定の工夫も必要である。(事例2)

(2) 長期の指導計画の改善

- ・入園当初の、自分のやりたいことを思う存分楽しむ段階から、少しずつ集団を意識し、友達と共に行動をしようとする姿が見られるようになった時期である。「一緒に楽しく活動する」ことをめあてとする活動を、園生活の他の場面にも位置づけ、重点化を図りたい。

第2節 多様な動きを経験する

近年、地域や家庭において戸外で遊ぶ機会が不足し、幼児の体力の低下や生活リズムの乱れが課題となっている。幼児が全身を思い切り使って自らの運動欲求を満たし、多様な動きに親しむことは、幼児期に必要な基本的な動きを身に付けるだけでなく、心と体の調和のとれた発達へとつながる。教師は、幼児の発想や興味を大切にして自ら様々な活動に取り組んでいくような工夫が必要である。

ここでは、3年保育3歳児の実践事例として、感触の心地よさから心を開放させて体を動かす姿（事例1「冷たくて気持ちいい」）、固定遊具に親しむ中で自分なりの動きを試す姿（事例2「もっと遠くに跳びたい」）、自分の作った物を使って体を動かす姿（事例3「凧と一緒に走ろう」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P52～P55）

1 幼児の実態（3年保育3歳児クラス 20名）

入園当初は、初めての集団生活に不安を示す様子が見られたが、教師との関わりに慣れ、気持ちの拠り所となる場所や好きな遊具を見つけられるようになってきている。保育室で好きな遊びが見つかり、戸外でも安心して過ごせるようになり、滑り台やブランコ等の固定遊具に興味をもち、意欲的に取り組む姿が見られる。中には、自分の思うように動くことが難しかったり、体を動かして遊ぶことに抵抗があり、取り組むまでに時間がかかったりする幼児もいる。

2 指導のねらい

- ・感触に親しみ、開放感を味わいながら楽しむ。（事例1）
- ・興味をもった遊びを繰り返し楽しみ、自分なりの動きを試そうとする。（事例2）
- ・作った物を遊びに取り入れ、思い切り走る心地よさを感じる。（事例3）

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（1）「健康な心と体」]

- ・身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（2）「自立心」]

- ・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（10）「豊かな感性と表現」]

4 内容

- ・砂や水等の感触を感じながら、自分なりに取り組む。(事例1)
- ・固定遊具での遊びに興味をもち、繰り返し試す。(事例2)
- ・クレヨンやセロハンテープで自分の凧を作り、使って遊ぶ。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・あらかじめ砂場の砂を掘り起こし、タライに水を張っておくことで、すぐに遊び始められるようにする。(事例1)
- ・家庭によっては、砂や泥に思い切り触れたり、衣服が汚れたりすることに抵抗感をもつ場合もある。保護者会などの機会に、活動の意味を伝え、理解を得られるようにする。(事例1)
- ・どの幼児も満足して遊べるように、道具(ラバーリング)の数を十分に揃えておく。(事例2)
- ・幼児の技能で仕上げる事が可能な部分を残しながら教材を用意する。(事例3)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 冷たくて気持ちいい (5月中旬)

A児は朝の支度が済むと、すぐに裸足になって砂場へ駆け出していく。タライに張られた水を椀で汲み、足元に流し水が掛かることを喜ぶ。その様子にB児も興味をもち、同じようにタライから水を汲み出して、A児と同じ場所に流す。徐々に水が溜まっていくと、A児は持っていた椀をその場に置き、水溜まりに両腕を入れる。

A児「気持ちいいなあ！ドロドロ。(両腕を大きく回しながら泥をかき混ぜる)」

B児「Bちゃんもする！ドロドロ。(A児と同様に泥をかき混ぜる)」

A児「よし、もっといっぱい水入れて泥んこにしようよ。」

二人とも先程と同様に、タライの水を何度も汲み出す。徐々に水溜まりの範囲が広がっていく。

A児「すごい、海になったぞ。ようし、今度は入ってみよう。」と、両脚を入れる。

A児「きゃー！冷たい。先生も入ってみなよ。」

教師「いいよ、先生もおじゃまします。(足を入れる) 本当だ、冷たくて気持ちいいね。」

すぐにB児も一緒に入り、歓声をあげる。A児は泥の奥底まで足を入れようと足首を回しながら動かしたり、片足で立ち「ドロドロ」と言いながらもう一方の足を左右に揺らして泥を混ぜるようにしたりする。しばらくすると足だけでなく両手も水に付けて四つ這いになって泥の中を歩く。片付けの頃には、手足だけでなく衣服も泥だらけになっている。

A児B児ともに、満足そうな表情で保育室へ戻って来る。



○事例1に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

水や泥の感触の面白さから、腕や脚を大きく動かしてみたり、片足を軸にしなが
ら脚を回してみたりする動きが引き出されたと考えられる。入園当初、緊張し
た気持ちを抱えている幼児にとって、感覚的な心地よさを感じられる遊びを用意
することは、体も心も開放して楽しむ機会となり、安心して過ごすきっかけとな
ることから、ねらいの設定は妥当であったと考える。

(環境構成、教師の援助、家庭との連携)

教師は砂場での遊びがしやすいように、あらかじめ砂を掘り起こしておいた。
それにより、幼児は思い通りの動きができ、自分なりの動きへつながった。これら
の動きを、教師が十分に受け止め、一緒に楽しむ時間をもつことで、幼児は安心し
て楽しむことができた。

また、水を張るためにタライを用意したが、予想以上の量を使うことから、途中
で何度も追加する必要があった。タライの大きさや数等の検討が必要である。

事前に家庭の理解を得たことによって、幼児は砂や泥に思い切り触れることが
でき、意欲がさらに高まり、遊びを存分に楽しむ姿へつながった。

(2) 事例2 もっと遠くに跳びたい (9月上旬)

固定遊具を使い、上に乗ったり中に潜ったりする。当初は一段ずつ上り下りする
動きが中心だったが、慣れてくると素早く駆け上がったたり、段を抜かして跳び下り
たりする動きが加わる。C児は、跳び下りる際に足を踏み切ることで、遠くに着地
しようとする。

教師「(着地した場所を指で示しながら)Cちゃん、こんなに遠くまで跳んでいたよ」

C児はもう一度同じように試し、どこまで跳んだか着地した場所を教師に尋ね
る。教師は先程と同じように指で示す。C児の遊びを見ていたD児も興味をもち、
同じように試すようになる。

D児「先生、僕も長く跳べているかな？」

教師「うん、どんどん遠くに跳べるようになってきているね」

教師は、倉庫から赤色・黄色・青色のラバーリングを持って来ることにする。「こ
こまで跳べたら赤色にしようか。それよりも少し遠い場所に黄色を置くね。一番遠
くは青色だよ。どこまで跳べるかな。」と言いながら遊具に近い方から順に並べる。

C児とD児はその様子を遊具の上から眺めている。

D児は「先生、僕がジャンプするところ見ていてね」と、黄色のラバーリングに
着地する。

教師「黄色まで跳べていたよ」

C児が「今度は私のことも見ていて」と、D児
と同じく、黄色のラバーリングに着地する。再び
D児の番になる。先程よりも力強く踏み込んで
おり、青色のラバーリングに着地する。

教師「さっきは黄色だったけれど、今は青色
まで届いたよ」



その後、C児とD児が交互に繰り返す。しばらくするとC児はその場を離れ、倉庫へ向かう。ラバーリングを幾つも抱えて戻って来る。元のラバーリングの周りに広げるようにして並べていく。C児、D児共に、新たに加わったラバーリングに着地しようとしており、正面だけではなく、斜めの方向へ跳ぶ動きが加わる。

○事例2に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

固定遊具に親しみ、使って遊ぶことを繰り返すことで遊び方に慣れ、自ら新たな動きを考えて試すようになっており、ねらいの設定は相応しいと考える。C児は初め、高い場所から跳び下りることで満足していたが、動きを重ねることでより遠くに跳ぼうとする気持ちが生まれ、力強く踏み込む姿が引き出された。

(環境構成、教師の援助)

固定遊具の使い方について、遊具の特性から引き出される動きだけでなく、幼児が自ら考えて試す様子を教師が十分に認めることで、安心して自分なりに試すことにつながったと考えられる。ラバーリングを取り入れたことで、自分の着地点が明確になり、意欲が高まった。また、普段から使っている道具であることから遊びに取り入れやすく、幼児が自分で遊びを広げていく姿へつながった。

(3) 事例3 凧と一緒に走ろう (1月中旬)

教師は、寒い時期でも戸外で遊ぶ機会が充実するようにと、新たにハガキ凧(ハガキの大きさに切った厚紙を帆にした凧)で遊ぶ機会を好きな遊びの中で取り入れる。E児が、すぐに興味をもち、赤色のクレヨンを選び、ハガキに好きな絵を描く。

描き上がると、教師と一緒に凧糸をセロテープで貼り付けて完成させ、それを持って園庭へ駆け出していく。凧糸の先を持ちながら歩いたり走ったりする。凧は時々地面から離れて浮くが、引きずっていることが多い。

教師が、「Eちゃん、凧さんと一緒にお出掛けできて楽しいね。」と声を掛けると、E児は満足した表情で保育室へ戻って来る。

しばらくして今度は、F児が凧に興味をもつ。E児と同じ流れで凧を完成させ、園庭に持っていくと、力を出して思い切り走る。走っている間は凧が地面から離れ、浮いている。

教師「Fちゃんの凧、空を飛んでいるみたいだよ。」

教師の言葉を聞いてF児はさらに力を出して走るようになる。また、走りながら時々振り返っており、凧に目を向ける姿が見られる。

E児はF児の様子や教師とのやりとりをテラスから眺めている。しばらくすると、E児も再び園庭へ出掛け、凧を持って走る。一度目よりも力を出して走っており、時々後方に目を遣って浮いている凧の様子を気に掛ける様子



がある。

教師「Eちゃんの凧も空を飛んでいるみたいだね。」

E児は嬉しそうに何度も駆け回る。

○事例3に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

E児は、当初は凧揚げよりも自分の作品を所持することで満足している様子があった。F児の様子を目にすることで、新たに「凧を揚げる」ことに興味が向き、思い切り走る動きや、走りながら後方に目を向ける等、新たな動きが加わった。計画の段階では、個での取組が中心となると考え、ねらいを設定したが、友達の様子によって自分の動きを変える様子が見られた。

(環境構成、教師の援助)

教師があらかじめ出来上がった物を用意するのではなく、幼児の技能でできる余地を残しておくことで、物への愛着が沸き、幼児が自分の物として大事に使おうとする姿へつながった。製作場所や、遊び終えた後の置き場を室内と戸外の間にあるテラスに設定することで、室内外で互いのしていることに興味をもつきっかけとなった。

E児への援助に関して、初めから凧本来の遊び方にこだわって使わせるのではなく、幼児が楽しんでいることに共感する関わりを意識した。しかし、F児の様子に刺激を受けた後では、E児が「凧を揚げる」ことを意識するようになったことから、教師も幼児の興味に沿って関わりを変化させ、満足感へとつながるようにした。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

(ねらいや内容の妥当性)

- ・個々の遊びから、友達のしている遊びに興味を広がり関わりが増えていく時期であることから、友達関係に関する内容を含めることを意識しながらねらいを再考する。(事例3)

(環境の構成)

- ・幼児の実態から、水を多く使うことによって遊びの満足感が高まることを踏まえ、砂場に設置するタライの数を増やし不足することのないようにする。(事例1)
- ・前日と同じ遊びをすぐに始められるように、あらかじめラバーリングを固定遊具の側に置いておく。(事例2)

(2) 長期の指導計画の改善

- ・水と同様に感触の面白さや心地よさを感じられる指絵具を使った活動を同時期の指導計画後半に入れる。(事例1)
- ・固定遊具での遊びの中で見られた動きを整理し、長期の計画の中に下記の例のように追記することで、次年度以降の保育を組み立てるヒントとなるようにする。(事例2)

例：身近な遊具（ラバーリング、ビールケース等）を取り入れながら固定遊具を試す。

第2章-A 第2節 多様な動きを経験する p.6

固定遊具に続くように他の遊具（すのこ、短縄等）を並べコースを作る。

- ・ 凧揚げやコマ回し等、個々がじっくりと取り組んだり友達と試したりする遊びや教材を「伝統的な文化に親しむこと」と関連させながら取り入れる。（事例3）

第3節 食べ物への興味や関心をもつ

幼児は、食べる喜びや楽しさを味わうことや、食に関わる経験を通して諸感覚を刺激されながら興味関心を高めていく。幼児期に野菜や果実などを育てたり、調理に関わったりすることで、幼児なりに食べ物を大切にすゝる気持ちや、用意してくれる人々への感謝の気持ちが芽生え、食の大切さに気付いていくことにつながる。教師は、幼児にこのような体験をとおして、食べ物への興味や関心を高め、自ら進んで食べようとする気持ちが育つようにしたり、和やかな雰囲気ですィ事をし、皆で一緒に食べると楽しくておいしいと感じる体験を積み重ねていけるようにしたりすることが重要である。

ここでは、2年保育4歳児の実践事例を述べる。野菜の栽培活動を通して食べ物に興味関心をもつ姿（事例1「早く大きくならないかな」）、給食調理員さんの手伝いを意欲的に行う姿（事例2「調理員さんの手伝いをしよう」）、先生や友達と一緒に食べることを楽しむ姿（事例3「さつまいもパーティーをしよう」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P56～P59）

1 幼児の実態（2年保育4歳児クラス 13名）

入園して1ヶ月、毎日の給食でたくさんの野菜に触れるようになったことや、敷地内で育てられているキャベツやにんじん、じゃがいもの生長などを見ることで、少しずつ野菜に興味をもつようになってきた。「野菜は嫌い」「食べたくない」と言う幼児の姿もあるが、「苦手でも食べてみようかな」という気持ちももち始めている。

5月初め、家庭で野菜の苗植えをしたA児の話をきっかけに、「私たちもやってみたい」という声が聞かれるようになった。皆で育てることを決め、育てたい野菜や世話の仕方を話し合ううちに、野菜の栽培や収穫を楽しみにする姿が見られるようになった。

野菜の生長に興味や関心をもち始めた幼児に、自分たちの力で野菜を育てたり調理したりする体験をとおして、食べることへの興味や関心を高めたい。

2 指導のねらい

- ・身近な野菜を育てる体験や収穫をとおして、食べることに興味や関心をもつ。（事例1）
- ・給食作りの手伝いを体験し、食べ物や食に関わる人への感謝の気持ちをもつ。（事例2）
- ・収穫した野菜を調理して、皆で食べることを楽しむ。（事例3）

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かつて心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3(1)「健康な心と体」]

- ・家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人の様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、

遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3(5)「社会生活との関わり」]

- ・自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切に作る気持ちをもって関わるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3(7)「自然との関わり・生命尊重」]

4 内容

- ・野菜の栽培をしながら、食べ物の様子や変化を観察する。(事例1)
- ・身近な食べ物に親しみながら、食べ物に関わる人に接する。(事例2)
- ・先生や友達と協力して調理し、皆で作ったものを食べる。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・観察を継続的にできるように、身近な場所(園庭のプランターや隣接する畑)で栽培をする。(事例1)
- ・絵本や図鑑などで得られた情報などを、遊びに取り入れやすいように見やすく保育室に設定するなどし、幼児の情報との出会いを作っていく。その際、幼児の気付きや自分で調べたこと、遊びの経過やそこで発見したことなどを、絵や写真等で継続的に観察し掲示する機会や場を設ける。(事例1・2・3)
- ・本物の食材と道具を使って調理を体験できる場を設ける。その際、難しい調理ではなく、幼児が「自分でやった」という達成感が味わえるような調理方法や内容にする。(事例2・3)
- ・友達と一緒に収穫した野菜を皆で一緒に食べる楽しさや嬉しさが味わえるように場を設定する。(事例3)
- ・便りや掲示、降園時の連絡などで、体験したことや幼児の姿を保護者に伝え、家庭生活とつなげる。(事例1・2・3)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 早く大きくなれないかな(5月上旬)

夏野菜の苗を植える前に、皆でじっくり観察してみることにした。「これは何の野菜の苗かな?」という教師の問いかけに、触ってみたり、においをかいだりしながらじっくりと観察をしている。

A児「紫色の花が咲いているから、これはなすの苗だね。」

B児「きゅうりの苗はどれだろう。緑色の花は咲いていないね。」

C児「この苗の花は黄色いけれど、トマトのにおいがするよ。きっとトマトの苗だ。」
なす、きゅうり、ピーマン、トマトの苗を囲みながら、自分達の思ったことを発言

していく。その後、自分で植えたい苗を選び、畑やプランターに土や腐葉土を入れて準備し苗植えをした。幼児が継続して観察や世話ができるように、苗植えをしたプランターを目のつきやすい位置に置き、個人用のじょうろも用意した。毎朝水やりをしながら野菜の生長を楽しみにしている様子がある。

数日後、

D児「先生、赤ちゃんきゅうりができているよ。」

E児「かわいいね。早く大きくならないかな。」

B児「この黄色いのがきゅうりの花だったんだね。」

C児「他の野菜にも赤ちゃんできているかな。見てみよう。」



幼児の気づきや生長の様子を記録して掲示したり、学級内で知らせ合う機会を設けたりした。毎朝水やりをしながら収穫の日を楽しみにしている。

D児「きゅうりが大きくなったよ。」

B児「なんだかとげとげしているね。触るとちくちくする。」

A児「ちくちくしているのは新鮮な証拠なんだって。」

教師「おいしそうだね。もう食べられるかな。」

B児「もっと大きくなりそうだよ。今採ったらかわいそう。」

C児「そうだね、もう少し待とう。あと一日かな、二日かな。」

A児「早く食べたいな。楽しみだね。」

毎日水やりをしながら、観察を続ける。

D児「ちょうどよい大きさになったんじゃない？」

A児「そうだね。おいしそう。」



皆が納得する大きさになるまで待ってから収穫をした。

収穫時はとても嬉しそうで、「私たちが育てた野菜だよ。」と、自慢げに皆に見せて回っていた。

○事例1に対する評価

(幼児理解)

幼児の会話から、毎日水やりなどの世話をしたことで野菜への愛情が育っていることが感じられる。「私たちが育てた野菜」という言葉から、「自分も何かを育てることができる」という自己効力感の高まりも感じられる。

(教師の指導)

毎日観察ができる場所で栽培したことで、小さな変化にも気づき、野菜の生長を喜ぶ姿があった。教師が幼児の発する言葉を大切にすることで、感じたことをのびのびと表現することができた。きゅうりの触感やトマトのにおいなどへの気づきを皆で共有することは、他の幼児にも刺激となり、野菜の生長に興味関心を示す幼児が増えていった。

(2) 事例2 調理員さんの手伝いをしよう(6月下旬)

入園から2カ月ほどたち給食に慣れてきた頃、「調理員さんは毎日何人分の給食を作っているのだろう」ということが話題になった。幼稚園、小学校の給食を合わせると

その数が500食以上だということを聞くと皆驚き、「調理員さんが大変だからお手伝いをしよう」ということになり、旬の食材であるとうもろこしの皮むきの手伝いをすることになった。

F児「皮の洋服をたくさんきているんだね。たけのこみたい。」

G児「おひげを全部取るのが難しいね。」

教師「全部きれいに取ると、調理員さんがすぐに調理できるから嬉しいんだって。おひげがついていると食べにくいから、いつもきれいに取ってくれているんだよ。」



H児「調理員さんは毎日大変なんだね。きれいにとるぞ。」

F児「今日の給食で皆が食べるんでしょ？小学生も？園長先生も？」

教師「皆食べるよ。皆、今日の給食を楽しみにしているよ。」

I児「それなら、たくさんむかなきゃね。みんなのためにがんばろう。」

幼児は、一つ一つ丁寧に皮むきをした。むき終わると、自分たちで届けたいという意見が出され、年長組の当番が運ぶことになった。「たくさんあるから、重たいけどがんばって。」「調理員さんに渡してきてね。」と、嬉しそうに声をかけていた。給食の時間まで「いい匂いがしてきた。」と話したり、給食室を度々覗いたりしながらとても楽しみにしている。給食の時間になり、おいしそうとうもろこしが配膳された。

G児「僕たちがむいたとうもろこしだ。」

F児「おいしいね。調理員さん、おいしくしてくれてありがとう。」

H児「本当だ！おいしいね。私、初めて食べられたよ。」

普段苦手な食べ物としないH児も進んで口に、「おいしい」と、満足そうな表情を浮かべていた。小学校の放送や掲示板でも「幼稚園のみなさんが給食のとうもろこしの皮むきをしてくれました。」と紹介され、とても嬉しそうだった。教師や小学校の児童に「とうもろこし食べたよ。」と声を掛けられて満足そうな表情を浮かべていた。

○事例2に対する評価

(幼児理解)

「調理員さんの手伝いをする」ということをとても喜び、「給食を食べる皆のためにがんばろう」「調理員さんが大変だから手伝おう」という思いで主体的に活動していた。調理に関わることや、友達が「おいしい」と喜んで食べている姿から自分も食べてみようという幼児の思いの変容も見られた。また、いろいろな人に「ありがとう」「助かったよ」と声を掛けてもらうことで、さらに満足感を感じる姿もあった。調理前の食材に触れたことも、食べ物への興味関心を深めることとなった。

(教師の指導)

幼児の気付きや思いを認め受け止めながら、調理員さんの手伝いをすることや食べることに期待をもてるようにした。皆の役に立っているということやいつも調理をしてくれる人々の気持ちを伝えることで、さらに関心が深まった。これまで、食べることが中心だった給食が、「誰かのためにやってみよう」「自分たちでや

ってみよう」と心を動かし、主体的に関わることができたと考える。

(3) 事例3 さつまいもパーティーをしよう（10月下旬）

1学期に、収穫したじゃがいもを使って年長組が調理をし、カレーパーティーを開いてくれた。10月にさつまいもの収穫をした際、皆でさつまいもを食べたいという声上がり、家に持ち帰って家族と食べる分と、幼稚園で調理をして「さつまいもパーティー」を開いて食べる分に分けることにした。

幼児が、自分たちで調理ができるように、調理内容や調理道具を配慮し、さつまいもの茶巾づくりをすることになり、さつまいもを洗ってつぶしたり、味付けや成形したりすることを幼児が行った。

J児「皮をむいたさつまいもは白かったのに、ゆでたら黄色くなったよ。」

K児「おいしいにおいがするね。甘いにおいだね。」

L児「さつまいもを潰すのって力があるんだね。」

J児「熱い。なかなか難しいね。お母さんもいつも大変なんだね。」

K児「おいしくなーれ。おいしくなーれ。」

試行錯誤しながら友達と協力して作り上げ、可愛いお皿やナフキンに飾り付けてから皆で食べた。

J児「ハロウィンパーティー楽しいね。」

M児「甘くておいしいね。他の先生たちにもあげたいな。」

N児「おいしいからお母さんにも作り方を教えてあげよう。」



その後、他の先生に届けておやつに食べてもらった。保護者には、降園時に幼児の様子やレシピを伝えた。後日、保護者から「子供と一緒に茶巾を作ってみました。」
「家でもさつまいもをおいしく食べました。」という話が多く聞かれた。

○事例3に対する評価

(幼児理解)

自分で調理することで諸感覚が働き、さつまいもの様子の変化を感じ取り、加熱前と加熱後の変化に気付く姿が見られた。また、調理員さんやお母さんなど、いつも自分のために調理してくれる人への感謝の気持ちをもつことができた。自分たちで育て収穫した野菜を調理し作り上げたことは、「自分でできた」という喜びや自信となり、「食べてみたい」「他の人にも食べてもらいたい」「作り方を教えてあげたい」という姿につながった。

(教師の指導・家庭との連携)

さつまいもを収穫するだけでなく、栽培から収穫、調理して食べるプロセスを経験できるようにしたことで、食べる喜びや楽しみ、食への興味関心を高めることになったと感じられる。収穫物を家に持ち帰ったり、幼児の姿を保護者に伝えたりすることで、家庭での食育にもつなげることができた。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

野菜の栽培を行うことは、幼児が食と自然のつながりを実感できる絶好の機会とな

り、食べ物を作ることの大切さを理解させ、食べ物の命をいただくことへの感謝の気持ちを育てることにつながる。世話や観察がしやすいように、身近な場所で栽培できる環境を整えることで興味や関心の継続につながり、収穫に向けて期待感をもったり、主体的に関わろうとしたりする姿に結びつく。

収穫した野菜は、幼児の発達や興味関心に合わせて、食べ方や調理方法を検討し、体験できるようにする。

また、幼児が自ら進んで食べることを楽しむためには、教師や友達との温かい人間関係づくりが基盤となる。遊びや生活、行事などを通していろいろな食べ物に対する興味や関心をもてるように言葉を掛けたり、和やかな雰囲気です食事を楽しめるように援助したりすることが大切である。また、食べ物への興味や関心を高めるため、教師は、幼児の言葉による伝え合いが広がる雰囲気づくりや、幼児の野菜の生長や収穫を喜ぶ気持ちに共感していくようにしていく。

(2) 長期の指導計画の改善

友達や教師と一緒に野菜の栽培をすることは、野菜を身近なものに感じるきっかけになる。種から育てる野菜や苗から育てる野菜、花が実になる野菜や茎や根が膨らんで食べられている野菜など、様々な野菜に触れられるように年間を通して計画していく。

生活の中や絵本、図鑑などで食べ物を知ったり、実際に栽培、収穫、調理、制作遊びをするなどして、連続性のある計画を立てることも大切である。行事食や郷土料理、地場産物、旬の食べ物などを幼児に触れさせることも、食べ物の理解や興味関心を深めることになるため、計画的に取り入れていきたい。

第4節 工夫したり、協力したりし一緒に活動する楽しさを味わう

幼児一人一人が自己を発揮し、「楽しい。やってみたい。」という気持ちで遊びに取り組んでいくと、友達の存在に気付く、友達の遊びに興味をもったり、一緒に遊びたいという思いになったりする。時には、思いがぶつかり合うこともあるが、友達と一緒に遊ぶことが楽しいと感じ、力を合わせて一つのことに取り組む姿、友達と一緒に活動する楽しさへとつながっていく。

ここでは、2年保育5歳児の実践事例として、友達と一緒に遠足を再現して遊ぶ姿（事例1「〇〇グリーンセンターここから入りますよ」）、友達と力を合わせて一つのものをつくり上げる姿（事例2「ぞうの鼻ってどこにあるの」）、一つの目的に向かって友達と協力したり、考えたりして遊びを進める姿（事例3「きび団子もらったお礼にしたら」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P60～P63）

1 幼児の実態（2年保育 5歳児クラス 27名）

年長組へ進級と同時にクラスが変わり、新しい友達関係の輪が広がりつつある中、遊び方もダイナミックになり、友達のしていることに興味をもって関わっている姿が見られる。しかし、自分の思いを強く通そうとしたり、思いをうまく、言葉にして相手に伝えることが難しかったりすることから幼児同士のいざこざも見られる。その際、教師は、幼児の思いを聞き、共感したり、代弁したりして、幼児が自分の思いを自分なりの言葉で相手に伝えられるように配慮している。

本学級は、明るく元気いっぱいの幼児が多く、好奇心旺盛で新しいものや遊びに興味を示し、友達や教師が楽しそうにしているとそばに来て様子を見て、ちょっとした変化に気付く声をかけたり、手伝ってあげたりする姿が見られる。

2 指導のねらい（事例1、2、3）

- ・友達と考えを出し合いながら、遊びを進める楽しさを味わう。
- ・友達と認め合い、一緒にやり遂げた満足感をもつ。
- ・友達と遊び方を考えたり工夫したりしながら一緒に遊ぶことを楽しむ。
- ・目的に向かって友達と協力したり工夫したりしてやり遂げた喜びを味わう。

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2節の3(3)「協同性」]

- ・身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付く、

自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2節の3 (6)「思考力の芽生え」]

4 内容

- ・ 友達の考えを聞いたり、自分の考えを話したりして遠足を再現して遊ぶ。(事例1)
- ・ 共通の目的をもって互いのイメージを出し合いながら、友達と力を合わせて一つのものをつくり上げる。(事例2)
- ・ 一つの目的に向かって友達と協力したり、考えたりして劇遊びをする。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・ 興味や活動意欲の高まりを受け止め、多様な動きが体験できるような環境を工夫する。
(事例1)
- ・ 幼児が相談したり、協力したりできるよう、十分な時間を確保し、見通しをもてるようにする。(事例1、2)
- ・ 友達やクラス全体で、創作や表現を楽しめるような活動を取り上げ、同じ目標や目的に向かって取り組む満足感を味わい、共同する楽しさや充実感を味わえるような機会を設ける。(事例3)
- ・ 幼稚園での経験が意欲・自信へとつながっていけるよう、様々な機会を通じて家庭に情報を発信し、連携をとりながら幼児がより豊かな生活が送れるようにする。
(事例1、2、3)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 ○○グリーンセンターここから入りますよ！ (5月上旬)

前日、遠足で行った大きな公園(グリーンセンター)の絵を大きな紙に描き、それを遊戯室に提示した。

A児が、「先生、昨日のグリーンセンターを遊戯室につくろうよ。」と言ったので、教師が、「いいね。またみんなで楽しめるね。」と、A児の思いを受け入れた。周りにいた幼児も、「○○グリーンセンターだ！つくろう。」と同意し、遊戯室に○○グリーンセンターをつくることになった。さっそくアスレチックづくりが始まった。

ビーム(巧技台)を見つけた幼児が集まって来る。

A児「橋をつくろう。」

教師「どこにつくる。」

B児「あっちにつくろう。」

C児「ぼくも手伝うよ。」

皆で「せーの。」と声を合わせて巧技台を運び、橋をつくった。

A児「この橋とつながるように、ここは、はしごを置こうよ。」

教師「すごい、○○グリーンセンターのアスレチックみたいだね。」と、幼児たちが自分たちで遊びをつくり上げていくことができるよう言葉かけをする。

C児「長い滑り台もあったから滑り台もつくろう。」とA児やB児を誘い、重いはしごや滑り台、太鼓橋などを教師と一緒に運び、それらをつなげていった。すると、A児やC児が入口の所に何も無いことに気付く。

A児「ここは、どうしよう。」

C児「上からぶら下がるやつ、あったでしょ。あれつくろうか。」

D児「でも、上からぶら下げるところがないから、できないよ。」と話す。

A児は、以前大きな積木やソフト積木を使って迷路をつくったことを思い出し、

A児「ここは、入り口にして迷路にしよう。」と積木を並べて迷路をつくる。

E児「ぼくは、門をつくるね。」

とソフト積木を積み上げ、通ることができるように門をつくった。教師はその様子を見守りながら、

教師「そうだね。グリーンセンターの大きな門通ったね。」と幼児たちの考えに共感する。幼児たちは満足そうにうなづく。

A児「ここが入口ってわかるように看板つくろうよ。」と看板をつくった。

B児「〇〇アスレチックができた！」

教師「素敵な門だね。ここが入口ってすぐわかるね。」と周りにいた幼児にも知らせると、「本当だ。僕も入れて。」と仲間入りしてきた。

A児「〇〇グリーンセンターここから入りますよ。」

門に入ると、嬉しそうに自分たちでつくったアスレチックで遊び、前日の遠足を思い出している。

⑨ 〇〇には、幼稚園名が入る。

○事例1に対する評価

(幼児理解)

遠足で見たことやしたことを、これまでの経験を生かして再現し、そのプロセスにおいて、友達に相談したり協力して作業したりすることを楽しんでいる。再現したことから、更に工夫を重ね、共感した幼児と共に遊びを広げている。

(教師の指導・家庭との連携)

- ・一人一人の幼児が自分の考えや感じたことをのびのびと話したり、活動に進んで取り組んだりしていけるように、今まで築いてきた信頼関係を基盤にそれぞれが思いを出し合う様子を見守る。また、幼児が自ら周囲に働きかけ、自己を發揮していけるように共感したり認めたりするなどの援助をしていった。
- ・家庭でも行きやすい場所として、市内にあるグリーンセンターを園外保育の場所とした。

(2) 事例2 ぞうの鼻ってどこにあるの。(11月上旬)

動物園への遠足後、幼児たちは動物を作り始めた。

E児「『ぞう』をつくりたいね。」

F児「いいね。大きいのをつくろう。」

と、自分のイメージに合った大きさのダンボールを探して組み合わせたり、積んだりしながら体と頭を作る。鼻を作ることになるが、それぞれの思いが一つにならず、

進まない。教師が、「どんな『ぞう』にしたいの。」とたずねる。

G児「みんなで遊べるのがいいよ。」

F児「いいね。」

H児は「でも、どうやって。」と困っている。

教師「どういうふうにしたいの。」

E児「滑れるようにするのはどう。」

I児「鼻の所を滑り台にするといいんじゃない。」

F児「大きいダンボールを持って来て滑り台をつくろうよ。」

J児「でも、段ボールじゃ壊れるよ。」

G児「そうだよ。折れて壊れるよ。」

教師「そうか。みんなが乗っても壊れない滑り台あるかな。」

F児「そうだ。遊戯室でやる滑り台、あれをもってこようよ。」

E児「それ、いいね。」と口々に話す。

教師は幼児の様子を見守り、

教師「みんなで取りにいきましょうか。」

と遊戯室にある滑り台（巧技台）を一緒に取りに行く。

E児「どこにつける。」

F児「年少さんでも滑れる所にしようよ。」

などと話をしながらE児はぞうの顔の横に滑り台を置く。

F児「顔の横に鼻があるのは変だよ。」

G児「じゃあ、後ろはどう。」

H児「体に鼻はないよ。」

教師「ぞうの鼻ってどこにあったかな。」と声をかける。

F児「ぞうの鼻は顔の前にあるよね。」

E児「じゃあ、ここだね。」

とE児とF児は、滑り台を顔の前に置く。「いいね。本物のぞうみたいだね。」と体、頭、鼻とつながったぞうを満足そうに見ている。

G児「そうだ。ここに穴あけてここから通れるようにすれば。」

D児「いいね。ここを滑れるようにしよう。」

体から頭を通り、鼻を滑ることができるぞうが完成した。ぞうが完成すると、「たくさん動物をつくって、ぼくらの幼稚園を動物園にしよう！」と、次の動物を作る相談を始めたり、材料を集めたりする幼児の姿が見られた。

○事例2に対する評価

（幼児理解）

- ・友達と共通の目的をもって動物をつくる中で、それぞれいろいろな友達と関わり、考えを出し合ったり相談したりしながら進めていた。時には、ぶつかり合う場面もあったが、幼児なりに折り合いをつけたり譲り合ったりしていた。友達と一緒に作り上げる楽しさを感じている様子が見られた。
- ・「ぼくたちの幼稚園を動物園にしよう。」と遊びや具体的なイメージが広がり膨らんでいった。これまでの、段ボールを使った遊びや、段ボールを活用しての制

作等の経験により、友達と一緒に考えを生み出し、遊びが広がっていった。

(教師の指導・家庭との連携)

- ・ 幼児が考えを出し合って遊びを進めていく場面と、幼児の思いを教師が汲み取って実現していけるように環境を整える場面との見極めは難しい。それぞれの幼児の考えを受け止め、そのことを言葉にして幼児に伝えることで、幼児は更なる考えを生み出した。幼児一人一人の思いや考えをじっくり聞き、理解したり共感したりしていくことが大切である。
- ・ 友達と一緒に、一つのものをつくり上げる面白さや満足感を味わえるように、幼児の目的達成のための教師の援助の在り方を工夫していくことが大切である。
- ・ 幼稚園の行事の中で、保護者参加の親子動物園遠足は、親子での活動となっている。動物に触れるなどの自然との関わり方を保護者に知らせるなどして、幼稚園での生活が家庭でも生かされるようにしていく。
- ・ 降園時の機会や学級だよりなどを活用して幼児の遊びの様子や頑張っている姿を伝える。ここでは、親子で行った動物園遠足が、遊びの中で再現されている様子を伝え、保護者が幼児と体験や感動を共有することで、幼児の気持ちや言動の意味に気付いたり、幼児の発達の姿を見通したりすることにつながる。

(3) 事例3 きび団子をもらったお礼にしたら (2月上旬)

学級で教師が「ももたろう」の素話をする、話に興味をもちイメージを膨らませながら、途中の言葉や歌と一緒に口ずさみ始める。話を楽しんでいると、みんなで「ももたろう」の劇遊びをしようということになる。

幼児が劇をつくり上げていく中で、気付いたことや考えたことを友達同士で話し合う。さくら組の「ももたろう」の話には、どんな役をつくらうか、どのような話の筋で話を進めていこうか、など、何度も話合う日が続く。

ある日、役を決めていると、役ごとに得意技を入れていこうということになった。「ももたろうは、鬼退治に行く前に技をしよう。」「そうだね。」「おじいさんとおばあさんは、最初だね。」などと相談をし、劇遊びを進めていく。

I 児「犬役の得意技はやらなかったね。」

犬役の幼児がどこで得意技を見せたらいいかわからず困っている。

教師「そうだね。どこで見せるのがいいかな。」とクラス全体に投げかけると、

J 児「ワンって言ったら、得意技入れたら。」

I 児「それ言った後だと、得意技のダンスするのが難しいよ。」

K 児「じゃあ、帰るときは。」

L 児「帰るときは、すぐ音楽かかるし・・・」

と、それぞれの幼児が意見を出す。なかなか決まらずにいると、

M 児「きび団子をもらったお礼にしたら。」

I 児「それ、いいね。」

J 児「すごくいい。」

I 児「犬の得意技をいれて、もう一回やろうよ。」

「いいね。」「やろう。」「楽しみ。」という声が次々と聞かれ、教師は「ますます、素敵なお話になるね。」と、声を掛けた。

○事例3に対する評価

(幼児理解)

一人一人がアイデアや思いを出しみんなで劇をつくり出す楽しさを感じている様子が見られた。劇遊びという活動の中で、自分の思いや考えが友達や教師に受け容れられたり、互いの思いを認め合ったりしながら、友達と一緒に協力して一つのものをつくり上げていく経験が自信へとつながっていく。「それ、いいね。」「すごくいい。」と認め合う年長2月という時期らしい成長が感じられる。

(教師の指導)

- ・学級全体で課題を共有できるように教師が意図していくと、幼児は更にいろいろな友達に関心をもつようになり、個々の思いを出し合えるようになっていった。今まで築き上げてきた互いを認め合える信頼関係を基盤に、幼児の思いや考えをみんなで話し合えるように場を設けたり、幼児同士が互いに認め合えるように教師が援助したりしていくことによって、同じ目的に向かって考えを出し合う楽しさや達成感を味わうことができた。
- ・劇遊びに自信をもって取り組むようになると、「お家の人に見せたい」という声上がる。そのことを想定し、劇遊び参観の日を設定しておく、幼児は、「お母さんに見せるからもっと素敵にしたい」と更に友達と協力して、劇遊びに取り組んだ。
- ・幼児たちの思いを認め、劇をみんなでつくり上げていく満足感を得たり、困ったことをみんなで解決したりした経験を自信へとつなげるようにした。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

- ・教師は、幼児がいろいろな友達と関わり、友達の思いを受け止められるように、共感したり代弁したりしていく。
- ・幼児同士が共通の目的を実現しようとする過程を丁寧に捉え、新たな交友関係を広げていけるよう、幼児が思いを伝え合っている姿や友達の考えを受け容れる姿を認めたり、幼児の思いを仲介したりして、同じ目的をもって遊べるように援助していく。

(2) 長期の指導計画の改善

- ・幼児が自分から興味をもって環境に関わることによって様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験をする中で、幼児が興味や関心のある活動にじっくりと取り組むことができるように、時間・空間・仲間を保障していく。
- ・たくさんの友達と出会うきっかけが、新しい関係性につながっていく。多様な関係性を育てるため、大勢で遊びを展開していくことができるよう、計画的に環境を構成し保育を展開していく。

第5節 前向きな見通しをもって諦めずにやり遂げる

幼児期は、自分の力を十分に発揮し、友達と協力したり励まし合ったりする経験により諦めずに最後までやり遂げようとする力が育つ。幼稚園においても園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わい、いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもてるような環境作りが望まれる。

また、教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基礎となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験したり、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力でやることの充実感を味わったりすることができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うことが大切である。

ここでは、3年保育5歳児の実践事例を述べる。運動会の練習に繰り返し取り組み、やり遂げた達成感を味わう姿（事例1「僕も走りたい」事例2「僕も走りたい」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P56～P59）

1 幼児の実態（3年保育5歳児クラス 30名）

進級してひと月も経つと、クラスの新しい友達との関係にも慣れ、一人一人の幼児が自己を発揮し活発に遊ぶ姿が見られるようになってきた。気の合う友達とやり取りをしながら遊ぶ姿も多くなり、遊びを十分に味わい、満足感をもって生活を楽しめているようだ。一方で自分の思いを通そうとしてけんかになることも増えてきた。教師は、活発に遊べるようになってきたことで起きるトラブルに対して、自分たちで解決できるように導いたり、相手の気持ちがわかるように助言したりしている。

2学期になると、戸外遊びも活発になり、友達と誘い合って鬼ごっこやドッジボール、リレーなど、ルールを守りながら繰り返し遊ぶ姿が見られるようになってきた。運動会でのクラス対抗のリレー競技も視野に入れて練習する幼児たちも多くなってきている。しかし、中には勝敗にこだわり、リレーに意欲をもてない幼児もいる。

2 指導のねらい

- ・目的に向かって友達と力を合せて取組、やり遂げた充実感を味わう。（事例1）
- ・友達と教え合ったり、競い合ったりする中で、友達一人一人の良さに気付く。

（事例2）

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中でしなければならないことを自覚し、自分の力でやるために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

[幼稚園教育要領 第1章第2の3(2)「自立心」

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (3)「協同性」]

- ・身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを感じながら、自分の考えをより良いものにするようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (6)「思考力の芽生え」]

4 内容

- ・運動会に行うリレーの練習に、繰り返し取り組む。(事例1)
- ・目標に向かって友達と力を合わせて、工夫してリレーの練習に取り組む。(事例2)

5 環境構成のポイント (事例1・事例2)

- ・幼児たちがリレーを楽しめるようトラックロープを張り手に持ちやすくしたバトンを準備し、自由に使用できるような置き場所を設置する。
- ・自分なりの目当てに向かって繰り返し取り組んでいる姿を十分に認め、友達同士でも励ましたり、認めたりできるような雰囲気作りを心掛ける。

※安全への配慮事項

- ・幼児が活動するトラックのロープの状態や危険物の有無等を、日々の点検において確認し、適切に整備するよう日々の安全点検を確実に実施する。

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 僕も走りたい。(9月中旬)

運動会に向けて、年長組の3クラス対抗リレーの練習が始まっている。クラスを赤チームと白チームの2つに分けて、6チームで競争している。すでに4回対戦しているが、2チーム共いつも4位から6位の間を行ったり来たりしている。足の速いA児は、今度こそは1位を取りたいと思って、クラスの皆に声をかけた。

A児「今度は、絶対1位になるよう、皆で練習しようよ。」

B児「無理だよ。また、今日もビリだよ。練習なんかするだけ、疲れちゃうよ。」

少し離れたところで2人の話を聞いていたC児は、B児が走って行ってしまってから、A児の傍に寄ってきて、

C児「A君、僕のために1位になれなくてごめんね。僕ももっと速く走りたいんだ。どうしたらいいかな。」

A児「うーん、そうだなあ。僕は、2学期になってから家から園まで走っているよ。少し速くなった気がするけど。園でも毎日練習しようか。」

C児「うん、やってみる。」

翌日からC児は、母親が自転車をこいでいる傍らで走って登園してきた。

園でもC児は、A児に追いつけないながらも連日園庭のトラックを走っている。い

つの間にか、だんだん仲間が増えて来て一緒に走り始めるようになった。D児がバトンを2本持ってきて2チームの競争もできるようになった。時には、教師も加わってリレーと一緒に楽しんでいる。C児にも競争意欲がでてきて、C児が加わっているチームが勝つとチームの友達と手を取り合っで喜ぶ姿が見られるようになった。

○事例1に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

走ることが苦手なC児は、クラス対抗リレーで負けてばかりいることに引け目を感じている。そんな折、1位を目指そうとA児が中心になってクラスの皆に声をかけた。C児もA児のアドバイスを受けて練習を始める。練習を続けていくうちに徐々に走ることが楽しく、少しずつだが速く走れるようになっていく自分に自信が生まれている。

(環境構成、教師の援助、家庭との連携)

毎朝の園庭の掃除の際、トラックロープの整備をしたり、小石や危険物が落ちていないかを確認したりして、幼児たちが走りやすいように配慮している。また、一緒にリレーを楽しむことで幼児達の意欲を高めることにつながっている。

また、幼児が頑張っていることを家庭に伝えたり、家庭での取組の様子を聞き感謝の意を伝えたりするなど、家庭との連携を図り幼児の育ちを共有する。

(2) 事例2 優勝するために…(10月初旬)

A児やC児を含めたクラスの仲間がリレーの練習をしているのをB児は遠くから見ていることが多くなった。しかし、B児はなかなか入れない。

教師は、B児に「C君、頑張ってる練習してるね。B君はしないの。」と声をかける。

B児「どうせ、ビリだよ。練習なんかしたって…。」

教師「うーん、勝ちたいよね。どうしたらいいだろうね。そういえば、この間はバトンを落として、ビリになったんだよね。」

B児「そうか、バトンの練習をすればいいね。」

B児は皆のところへ駆けて行って声をかける。

B児「皆、バトンの練習もしようよ。この間、落としてビリになったよね。今度は、落とさないように練習しよう。」

A児「テレビでリレーを見たよ。右手の手のひらを上に向けてバトンをもらうんだ。右手で持ったまま走って、次の人に渡してたよ。止まらないで走りながら渡してたからすごく速かったよ。その練習をしてみればいいんじゃない。」

教師「じゃ、まず、みんなで縦に並んでバトンの受け渡しだけの練習をしてみる？」

B児「そうだね。みんな並ぼうよ。縦に1列だよ。秘密の特訓だね。」

A児「そうだね。何だか楽しくなってきたね。」

1列に並んで、バトンの受け渡しだけの練習が始められた。

A児「何回も練習したから、落とさないで渡せるようになってきたね。今度はトラッ



クを走ってみようか。」

その後のクラス対抗の練習では、クラスで輪になって、「エイエイオー」と気合を入れてから走った。練習の成果もあり、赤色チームが3位に、白チームが4位となって、クラスのリレーの練習に熱が入ってきた。走る順番もいろいろ替えて工夫してみるなど、子供達からの提案も取り入れて練習した。

運動会当日は2位と3位になり、クラス皆で手を取り合って喜び、教師も一緒にその喜びを分かち合った。

○事例2に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

B児は、当初、練習しても無理だと思い、練習に参加していなかった。しかし、A児とC児が練習している中に、クラスの仲間が練習に参加していく姿を遠目に見て、参加したい様子が見られたため教師が声をかけた。C児の頑張っている姿を認め、A児のリレーに勝ちたいという強い思いやクラスの仲間の後押しを感じて、一緒に頑張ろうという気持ちが芽生えている。

さらに、「バトンを落として、ビリになったんだよね」という教師の一言をヒントに、B児は「バトンの練習をしよう」と提案し、A児のアイデアも加わって、クラスの仲間が1つの目標に向かって諦めずにやり遂げようとする意欲が高まっている。練習の成果が結果につながったことで、やり遂げた充実感を味わうことができた。

(環境の構成、教師の援助・指導)

クラスの幼児たち全員が1つの目標に向けて繰り返し努力できるように、一人一人のリレーへの向き合い方を把握し、リレーの指導方法を図書館で調べたり、先輩教師に教えてもらったりして、適宜ふさわしい声かけや具体的なアドバイスができるように心掛けた。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

(ねらいや内容の妥当性)

運動会のクラス対抗リレーでの勝利に向けて、A児とC児の関わりを中心にクラスの仲間たちの団結力が強まり、A児のリーダー性、B児の意識の変容、C児の心身の向上などの成長が見られた。目標に向けて力を尽くしたことで、一定の成果を得ることができて、幼児たちに達成感が生まれた。

(環境の構成)

教師は、幼児が目標に向けて頑張ろうとしている過程でうまくいかない時に、幼児の表情や仕草、身体の動きから幼児の気持ちを読み取り、見通しがもてるように励ますなど、幼児の心に寄り添い支えることにより、幼児が自分の力でやり遂げることができるようにした。

教師は幼児に前向きな見通しをもたせるため、持ちやすいようなバトンを工夫したり、練習方法を工夫したりすることなども、幼児たちの話合いから進められるよう働きかけている。

(2) 長期の指導計画の改善

リレーを通して、競い合う気持ちを認めたり、引き出したりして、競い合う楽しさや面白さを感じられるようにしていく。また、チームでの競い合いを通して、自分の思いや考えを言葉で伝えたり、相手の話を聞いたりして言葉による伝え合いを楽しめるようにしたい。

第6節 様々な文化や伝統に親しむ

幼児は、四季折々の伝統的な行事に参加したり、唱歌やわらべうたの楽しさを味わったり、こま回しや凧揚げなどの伝統的な遊びをしたりすることを通して、様々な文化や伝統に親しみをもつようになっていく。また、地域の人々との関わりを通して自己肯定感を高め、安心感や役に立つ喜びを感じるようになっていく。さらに、異なる文化にも触れることで、より豊かな体験へとつながっていく。

ここでは、3年保育5歳児の具体的な実践事例として、先生や友達と一緒にわらべうた遊びをする姿（事例1「とんとんとん なんのおと？」）、国旗に親しむ姿（事例2「いろんな旗があるんだね（オリンピックごっこ）」）、地域の人と関わる姿（事例3「Aさんって、こま回し名人だね」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P68～P71）

1 幼児の実態（3年保育5歳児 計24名）

進級当初から、4歳児の時に経験した鬼遊びや、わらべうた遊び、ルールのある遊びなどに、友達と誘い合いながら楽しむ姿が見られた。また、イメージを膨らませながらいろいろなごっこ遊びをする中で、なりきって遊ぶことを楽しんでいた。

運動会を経験し、友達と力を合わせたり競い合ったりすることで、より一層学級の友達との結び付きが強くなっていった。友達と考えを出し合い、共通の目的に向かって遊ぶ楽しさを感じられるように、教師は幼児同士の経験や思い、言葉をつなげていくようにした。

昨年度までは、正月遊びや餅つきの行事を通して地域の高齢者との関わりをもってきた。年長児になり、めんこや、割りばし鉄砲などの昔遊びを教えてもらうなど、年間5回の交流を通して、「〇〇さん」と、名前を覚えて呼びながら、親しみをもって関わる姿がある。

これらの経験の積み重ねにより、伝統的な文化を身近に感じながら、地域とのつながりの意識が芽生えるようにしたい。

2 ねらい

- ・わらべ歌を歌ったり、遊んだりして楽しみ、伝統に親しむ。（事例1）
- ・いろいろな国や国旗があることを知り、興味や関心を広げる。（事例2）
- ・昔遊びをする中で、地域の人に親しみをもって関わり、難しい遊びに挑戦する。

（事例3）

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊び

や生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

〔幼稚園教育要領 第1章 第2の3(5)「社会生活との関わり」〕

- ・先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

〔幼稚園教育要領 第1章 第2の3(9)「言葉による伝え合い」〕

- ・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

〔幼稚園教育要領 第1章 第2の3(10)「豊かな感性と表現」〕

4 内容

- ・教師や友達と一緒に、わらべうた遊びを楽しむ。(事例1)
- ・いろいろな国の国旗をつくり、遊びに取り入れる。(事例2)
- ・地域の人との関わりを楽しみながら、伝統的な遊びに親しむ。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・学級の友達と一緒に安全に走り回れる場の広さを確保し、わらべうた遊びに親しみがもてるよう、遊び方を分かりやすく伝える。(事例1)
- ・国旗の絵本や図鑑、オリンピックに関する情報や写真などを準備し、遊びのイメージが広がるようにする。(事例2)
- ・地域の高齢者との交流では、自然な関わりがもてるようにしていく。(事例3)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 とんとんとん なんのおと? (5月下旬)

わらべうた遊び、「からすかずのこ」「ずいずいずっころばし」「どんどんばしわたれ」などに興味をもち、誘い合って遊んでいる。園生活の中でも、友達と声をそろえる楽しさや動作を合わせるおもしろさを感じている。

そこで、学級で「あぶくたった」を行う。

A児「知っているよ。僕、年中さんの時に年長さんとやったことがある。」

B児「僕も知っているよ。早くやろうよ。」

A児「僕、鬼になりたい。」

A児、B児は以前に遊んだ経験があったため、A児が鬼になり、B児は教師と共に他の幼児に遊び方を教えることになる。

教師・幼児「あーぶくたったーにえたったー、にえたかどうだかたべてみよ♪」

A児(鬼)の周りを歌いながら歩き、「むしゃむしゃむしゃ♪」と食べる真似をする。

A児(鬼)「くすぐったいよ!」

体が触れ合うことを楽しんでいる。

幼児達は「戸棚にしまってかぎをかけて、がしゃがしゃがしゃ。」「おててを洗ってごしごしごし。」「ご飯を食べてむしゃむしゃむしゃ。」「おふとん敷いてねましょ。」と、教師やB児の真似をしながら言葉に合わせた動作をする。

A児（鬼）「とんとんとん。」

教師・幼児「なんのおと？」

A児（鬼）「風のおと。」

教師・幼児「ああよかった。」

A児（鬼）「とんとんとん。」

教師・幼児「なんのおと？」

A児（鬼）「おばけのおと！」

幼児「キャー！」一斉に逃げる。

繰り返し遊んでいるうちに、友達と声をそろえて言葉を言ったり動作をしたりすることを楽しむようになる。鬼になった幼児は、音の出る物を想像して言葉にし、他の幼児は「おばけのおと」という言葉がいつ出てくるのかと期待している。

○事例1に対する評価

（幼児理解）

昨年、年長児と遊んだ経験があるA児とB児が遊びをリードし、わらべうた遊びの節回しや言葉の響き、リズムの心地よさを感じている。友達と手をつないで歌ったり、言葉に合わせて動作をしたりすることで一体感が生まれ、たくさんの友達と同じ遊びをする楽しさを感じていた。

鬼になった幼児は、音の出るものは何かを考えて言葉で伝えようとし、他の幼児は、「おばけのおと」という言葉により鬼が追いかけてくる期待感や、程よい緊張感を楽しんでいる。

（環境構成・教師の指導・家庭との連携）

わらべうた遊びの文化や奥深さを教師は熟知し、幼児の発達に合わせて遊びに取り入れていくことで、幼児はわらべうた遊びをより身近に感じるようになる。

さらに、異年齢児と関わって遊ぶ機会を意図的につくることで、わらべうた遊びは自然に伝承されていく。保育参観などにおいて、親子でわらべうた遊びに親しむ機会をつくり、家庭でも楽しめるように計画する。

(2) 事例2 いろんな旗があるんだね（オリンピックごっこ）（10月中旬）

運動会で飾った万国旗を見たり、親子で「聖火リレー」競技に参加したりすることで、いろいろな国の国旗やオリンピックに興味や関心が高まる。C児は、国旗の図鑑を熱心に見ている。

D児「この旗、見たことがある。オリンピックでみたよ。」と加わる。

教師「オランダってかいてあるね。」

D児「そうだ、サッカーの試合で見たことがある。」

「オランダの旗、つくりたいな。」

E児「ぼくは日本がいいな。」と、日本の旗をつくり始める。

F児、G児「いろんな旗があるんだね。」と興味を示す。

教師が絵の具と画用紙を用意すると、G児は図鑑を見ながらクレヨンと絵の具でブラジルの国旗を描き始める。

教師「難しい国旗に挑戦しているね。」G児の思いを認めていく。

D児「手に持つ旗にしたい。」と、広告紙を丸めた棒に貼り付ける。

安全面を考慮し、教師が事前に遊びを想定して準備した広告紙を使い、棒をつくる。

D児「みんなの応援をしてくる。」と旗を持って戸外に出掛ける。

他の幼児も刺激され、つくった旗に棒を貼り付けて戸外に持って行き、リレーごっこやサッカーをしている友達に、「がんばれー！」と旗を振って応援する。

翌日は、金メダルをつくることに遊びが発展する。

F児「階段にのぼるんだ。」と表彰台をイメージする。

教師「積み木でつくってみる？」と提案する。

E児「いいね！」と賛成し、表彰台づくりが始まる。

G児「ぼくもやりたい。」と、表彰台をつくり始める。

その後、「君が代」に合わせて日本の国旗が高く揚がっていくのを再現したいとイメージが広がっていく。

○事例2に対する評価

(環境構成・教師の指導・家庭地域との連携)

教師が意図的に国旗の絵本や図鑑、オリンピックの写真などを用意したことから、世界の国旗に関心をもち、国旗づくりからオリンピックごっこに発展していく。幼児の興味や関心の高まりに合わせ、タイミングよく材料や用具を提示し、教師も共同作業者となり幼児のイメージを実現するための援助をしていくことが大切である。

教師は幼児の予想される姿から適切な環境を構成しながらも、幼児の思いを受け止め、安全面に配慮しながら柔軟に対応していくことが必要である。

異なる国の文化に触れる機会として、地域・保護者ボランティアの協力による「英語で遊ぼう」を計画し、英語での簡単なあいさつや歌などを通して、様々な国の異なる文化について紹介していく。

(3) 事例3 Aさんって、こま回し名人だね(1月上旬)

H児、I児、J児は、投げごまに興味をもち、3人で競争することを楽しんでいる。

K児「ぼくもこまを回せるようになりたい。」と紐を巻こうとする。

K児「難しくてできないよ。」紐を巻くことが難しい。

教師「難しいね。でもだんだん上手になってきたよ。」

教師はK児の気持ちを受け止め、励ましながら少しずつ上達していく楽しさが経

験できるように援助していく。

数日後、地域の高齢者との交流活動で、こまを使って遊ぶ。

K児「何回やってもできない。」と、諦めかけている。

Aさん「おじさんが一緒に紐を巻いてあげようか？水をつけると巻きやすくなるんだよ。」

Aさんはバケツに水を汲んでくると、紐をさっと濡らす。

H児「えーっ、濡らしちゃうの？」

I児「濡れちゃった。」と二人で顔を見合わせる。

Aさんは慣れた手つきで紐を巻くと、あっという間にこまを回して見せる。さらに回っているこまを紐ですくい上げ、今度は手のひらで回す。

「すごい。すごい。」「Aさんって、こま回し名人だね。」と、Aさんの周りに幼児たちが集まってくる。こまを、K児に持たせる。

Aさん「力を抜いて、まっすぐ投げよ。」「いち、にの、さん！」

Aさんが、K児の手をもって一緒にこまを投げる。

Aさん「ほら、回った！」

教師、I児、J児「K君すごい！やったね。」

K児は「やったー！」と、満面の笑みで喜ぶ。

K児「もう一回やってみたい。」

Aさんに教えてもらいながら挑戦する。

K児「Aさん、ありがとう。Aさんみたいにできるように頑張るね。」

Aさん「おじさんも応援しているからね。今日は楽しかったよ。ありがとう。」

K児「お家に持って帰ってやりたい。もっと上手になりたい。」

「お父さんやお母さんにもみせたいな。」

K児は、降園時に迎えに来る保護者にこまを回して見せることや、家族みんなでこまを回して遊ぶことを楽しみにしている。

○事例3に対する評価

(幼児理解)

幼児にとって地域の高齢者は、ありのままの自分を受け止めてくれる居心地のよい存在のようである。高齢者との関わりをきっかけに、日本の伝統的な遊びである「こま」に興味や関心をもつことができた。

こまの回し方を教えてもらうことで遊びがより楽しくなることを経験し、遊びへの挑戦意欲に高まりが感じられる。さらに、「ありがとう」などの言葉をかけてもらうことで自分は大切にされているという自己肯定感につながっている。地域の高齢者との関わりを通して、安心感や人の役に立つ喜びや、人と関わる楽しさを感じていた。

(教師の指導・家庭との連携)

日本の伝統的な遊びであるこま回しは、指先の器用さや集中力を養いながら、教え合ったり、競い合ったりすることで対話も生まれる。教師は、幼児が昔遊びに取り組む様子や伝統的な遊びの奥深さ、教育的価値を、降園時や保育参観などを通して保護者に伝え、家族やいろいろな世代の人と楽しみながら受け継がれていくよう

にしたい。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

幼児が様々な文化や伝統に自然に興味や関心をもつようになるためには、幼児理解を基盤に、意図的、計画的に親しみをもつきっかけをつくることが大切である。幼児の発達の様子や興味、関心、季節の行事などを十分に考慮し、その時期にしか体験できないことは、機会を逃さずに取り入れていきたい。

幼児が伝統的な行事に参加したり、異なる文化に触れたりする際には、地域の人と関わることが多い。幼児が自己肯定感を高め、安心感や人の役に立つ喜びを感じられるように、地域の人と事前に十分な共通理解をしておくことが大切である。その後の保育の展開にどのようなつながっていくのかを考慮し、見通しをもった指導計画の改善に努めていく必要がある。

(2) 長期の指導計画の改善

様々な文化や伝統に親しむことは、園での四季折々の行事に関連していることが多い。一人一人の幼児の経験や発達する姿を捉え、その行事が幼児にとってどのような意味をもつのかを考慮し、行事がもたらす教育的価値について十分に検討していかなければならない。

心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、幼児が様々な文化や伝統に親しむことで、幼稚園生活がさらに豊かで充実したものとなるように年、学期、月などにわたる長期の指導計画の改善を行っていきたい。

第7節 考えたり、試したりして工夫する

幼児は常に身近な環境に興味や関心をもち、自分から関わっている。周囲の環境に、繰り返し、好奇心をもって関わり、自分なりに比べたり関連付けたりしながら遊ぶ中で、新たな発見をしたり、どうすればもっと面白くなるか考えたり試したりしながら工夫することを経験し、思考力や探究心が育まれていく。また、友達の思いや考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わうことで、自ら考えようとする気持ちが育っていく。

ここでは、2年保育5歳児の実践事例として、船が動く仕組みについて考えながら、繰り返し試す姿（事例1「船が動いたよ」事例2「どっちに進むかな」）、友達と共通の目的をもち、その目的を達成するために試行錯誤する姿（事例3「ゆらゆらする波が作りたい」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P72～P75）

1 幼児の実態（2年保育5歳児クラス 計27名）

進級当初より、年少時の関わりを基盤としながら、自分から興味のあることに関わる姿が見られた。学級の新しい友達との関わりが広がり、一緒に遊びを楽しむようになると、友達の取り組んでいることに対して興味・関心が高まり、自分からその遊びや活動に関わろうとする姿が見られるようになってきている。一方で、一つの遊びが深まる前に次の目新しい遊びに移ってしまうような様子が見られるので、遊びを工夫して発展させる面白さに気付けるように配慮している。

2 指導のねらい

- ・物の性質や仕組みなどに関心をもち、考えたり試したりしながら遊ぶことを楽しむ。
（事例1、事例2）
- ・共通の目的に向かって、友達と思いや考えを伝え合ったり認め合ったりして遊びを進めようとする。（事例3）

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

〔幼稚園教育要領 第1章 第2の3（3）「協同性」〕

- ・身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

〔幼稚園教育要領 第1章 第2の3（6）「思考力の芽生え」〕

4 内容

- ・友達と一緒に考えたり試したりしながら、身近な材料で船を作ったり、作った船で遊んだりする。(事例1、事例2)
- ・互いの考えを出し合いながら、友達と一緒にお話の内容を言葉や動きで表現したり、劇遊びに使うものを作ったりする。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・幼児が興味や関心をもっていることと関連させ、自分で考えたり試したり工夫しながら遊びを広げていけるように、幼児の思いや願い等を予測して素材や用具を準備するなど環境を整える。
- ・友達と目的を共有し、その目的に向かって試行錯誤をしていけるように、じっくりと考えたり繰り返し試したりすることのできる場や時間を保障する。
- ・幼児の思いや考え、考えたり試したりして工夫する姿を保護者に十分に認めてもらえるよう、幼児が考えたり試したりして工夫している過程や遊ぶ姿を具体的に知らせていく。

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 船が動いたよ(7月上旬)

数日前から牛乳パックや発泡トレイなどの素材を使った船を作ることに興味をもち、多くの幼児が取り組んでいた。牛乳パックで滑り台を作って水を流して船を動かしたり、うちわで風を送って船を進めたりと、どうしたら船が動くかを考えながら、船を動かすことを楽しんでいた。その中でA児は、自分の船が完成すると、船が動く仕組みに興味をもち、ヨーグルトのカップとゴムでスクリューのようなものを作る。A児「これをつければ、クルクル回って船が動くかもしれない。」

と、試してみるが、船はなかなか動かない。
教師「Aくん、いいことを考えたね。何か回るものをつけたら船が動くかもしれないね。」

A児の思いが実現するように、牛乳パック、割りばし、輪ゴム、発泡トレイを小さく切ったもの、牛乳パックを小さく切ったものなど、様々な素材を準備する。発泡トレイや牛乳パックを小さく切ったものの大きさは船の動きに影響するため、考えながら作ったり遊んだりする機会になればと考え、いろいろな大きさのものを準備する。

A児、B児らが新しい素材に興味をもち、「どうやって作るんだろう。」と船を作り始める。

輪ゴムをかけたり、発泡トレイや牛乳パックをビニールテープで貼ったりしながら、教師と一緒に作ってみる。「次はどうするのかな?」「こうしたら動くかな?」と友達と考えたり相談したりしながら、じっくりと作り進める。「ここに輪ゴムをくっつけると、これ(発泡ト



レイ) が動かないな。」「この割りばしはどこにつけたらいいの?」と、なかなか思うような船にならず、教師と一緒に何度も作り直す姿も見られる。

作ったり動かしたりを繰り返すうちに、巻いた輪ゴムが戻る時に発泡トレイや牛乳パックが回転する力で船が動く。「わあ、動いた動いた!」「すごい!」と動く船に驚き、喜んだ。「僕も作りたい。」と言って集まってきた友達に、A児、B児が「こうやって作るんだよ。」「教えてあげるね。」と作り方を伝える姿が見られた。

○事例1に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

一人一人の幼児が身近な素材を使って「船を動かしたい」という思いや願いをもち、水の力や風の力を利用して船を動かすことを繰り返し楽しんでいる。A児は船が動く仕組みを作ることに興味をもち、身近な材料を使って繰り返し船を作ったり動かしたりすることで、考えたり試したりしながら遊ぶことを経験しているので、ねらいや内容は妥当であったと考える。

(環境の構成、教師の指導)

A児の「船が動く仕組みを作りたい」という探求心が解決されるような素材を提示できるように、教師がそれぞれの素材についての理解を深めるとともに、タイミングを見ながら船作りの素材を準備するようにした。A児らが繰り返し素材を使って試すことで、発泡トレイなどが回転する力で動く船作りへと遊びが発展し、多くの幼児が興味をもって取り組んだ。素材の種類や大きさに配慮し、自分なりに考えたり試したりしていけるようにした。大きさや形など、自分なりの船のイメージを多様に表すことができるように、素材の種類について検討が必要である。

作ったり動かしたりすることを繰り返す中で、A児らが、困ったり良い考えが浮かばなかったりする場面があった。教師がきっかけになるようなアイデアを示したり、実際に教師が作る様子を見せたりすることで、ゴムの力で動く船を作ることへとつながった。

(2) 事例2 どっちに進むかな(7月上旬)

次の日も、多くの幼児が、自分が作った動く船で遊ぶ。

C児「あれ?後ろに動いたよ。」

D児「私の船は前に動いた。」

何度も繰り返し動かしているうちに、船が進む方向に違いがあることを発見した。

D児「先生、私の船、後ろに動いたよ。なんでかな?」

教師「本当だね。先生もやってみようかな。」

教師も発見に共感し、一緒に船を動かしてみる。船はゴムの巻き方によって進む方向が異なるため、教師は後ろに動くようにゴムを巻き、動かしてみた。

D児「先生のも後ろに進んだ。」

E児「ぼくは、さっきは前だったけど、今度は後ろだったよ。」

F児「私はずっと後ろだよ。」

何度も動かしながら、進む方向について友達と一緒に考える。

すると、繰り返し船を動かしていたG児が「あのね、こっちにくるくるってすると前に進んで、反対にくるくるってすると後ろに進んだよ。」と周囲の幼児に伝える。教師は「Gちゃんが大発見をしたよ。Gちゃんに聞いてごらん。」と促すなどして援助した。

友達の考えを聞き、自分なりに考えたり試したりする中で、ゴムの巻き方と船の進む方向に着目しながら動かすようになる。

「後ろに進むにはこっちかな？」

「こっちに巻いたら前に進むよ、きっと。」と遊びが続いていった。

H児「ゴムを前に巻くと後ろに進んで、後ろに巻くと前に進むよ。(ゴムを巻く方向と船が進む方向は) 反対だね。」

遊びの中で自分が気付いた法則性を友達や教師に話す姿が見られた。

○事例2に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

幼児は、何度も繰り返し船を動かして遊ぶうちに、船が進む方向とゴムの巻き方の関係性に気が付いていた。また、D児、E児らは、友達の姿を見たり、自分なりに発見したことや考えたことを友達と伝え合ったりする中で、自分の気付きや考えを整理しているように見受けられた。G児の発見が周囲の幼児に伝わることで、新しいことに気付く姿も見られた。

前日までの姿から、個々に考えたり試したりしながら船を作ったり動かしたりする姿が中心になると考えねらいを設定したが、友達との関わりの中で新しいことに気付く姿が多く見られた。

(環境の構成、教師の指導、家庭との連携)

多くの幼児が船を作り、動かしてみたいという思いをもって遊ぶ姿が予想されたので、大きなプールを準備し、自分なりに繰り返し試してみることでできる場を保障するようにした。

教師も一緒に船を動かすことで、船の進み方について幼児が自分の考えを伝え合い、話し合う姿を引き出した。一人一人の幼児の気付きを受け止め、周囲の幼児とその気付きを共有していけるように仲介することで、自分なりに考えたり試したりする姿や新しいことに気付いて考えを深める姿につながった。

幼児が試行錯誤しながら作り上げて遊んだものを家庭に持ち帰る際は、幼児と保護者が持ち帰ったもので遊んだり新たに作ったりして、一緒に楽しめるように家庭に伝えていく。

(3) 事例3 ゆらゆらする波が作りたい(1月下旬)

絵本の読み聞かせをきっかけに、学級の友達と一緒にお話ごっこが始まり、劇遊びを進めていく中で、I児、J児は海の波を作りたいと考えた。

I児「ゆらゆらするのがいいよね。」

J児「こっちとこっちを持ってこうやって(揺らす真似)するっていうのはどう？」

I 児「何で作ったらいいな。」

教師も一緒に材料を探すと、I 児が「これがいいかも。」と青いカラービニール袋を手にする。I 児とJ 児がカラービニール袋の端と端を持ってゆらゆらと揺らしてみるのが、何となく自分たちのイメージと違っていたのか、I 児「もうちょっとゆらゆらってなるといいんだけどな…。」と話す。

教師「I ちゃんたち、ゆらゆらする波を作りたいんだけど、うまくゆらゆらしないみたいなんだ。」

周りにいたK 児、L 児らに伝えると、K 児らはしばらく考えている。

K 児「大きくしたらいいんじゃない？」

I 児「それいいね！」

J 児「大きくしたらゆらゆらするかも。」

他の幼児も加わって、カラービニール袋の長さをステージの幅に合わせながら測り、つなぎ合わせる。3 枚ほど貼り合わせたところで端を持って揺らしてみる。先ほどよりは少しゆらゆらと揺れるようにはなったが、ビニールの厚みや重さで幼児には揺らしにくそうに見える。

I 児「ちょっとゆらゆらするようになったね。」

J 児「でも、大きくしてもあんまりゆらゆらしないね。」と納得がいかない様子である。

教師「ビニール袋って2 枚くっついているから、ここここを切って開いてからくっつけるという方法もあるね。」

I 児「やってみよう！」

波が完成し、「できた！」「見て！」と波を揺らしてみると、軽くなった波はよく揺れた。教師が「I ちゃんたちががんばって作った波、とってもよく揺れて素敵だね。」と十分に認めると、周りの友達からも「本物みたい！」「波があると、船が動いているように見えるね。」と言ってもらい、とても満足そうである。

「全部できたらお母さんたちにも見せたい。」という声が幼児から聞かれるようになったので、『お楽しみ会』として保護者にも見てもらうことを知らせると、さらに意欲をもって劇遊びに取り組むようになっていった。

○事例3 に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

I 児らは「ゆらゆらする波が作りたい」というイメージや目的をもち、その目的に向かって素材や作り方を考え、何度も試している。また、その目的がいろいろな友達と共有されることで、新たな考えが生まれたり、より目的に近付いたりする様子も見られる。I 児らがK 児らの考えを受け入れることで、波が少しずつ自分達が考えるものに近付いていっていることから、ねらいの設定は相応しかったと考える。

(環境の構成、教師の指導、家庭との連携)

これまで親しんできたいろいろな素材を準備しておくことで、自分たちの目的に見合ったものを自分たちで考え、選ぶことができるようにする。劇遊びに使うものを工夫して作ったり準備したりすることで、お話の内容を表現する言葉や動

きもさらにイメージが広がっていく姿が見られるようになる。

幼児が試行錯誤しながら表現しようとする中で、幼児だけでは目的に合った方法を見つけられないこともある。教師が、タイミングを見極めながらその方法を提示することで、達成する喜びを感じられるようにした。

幼児は自分たちの劇遊びを家の人に見てもらえるということが意欲となり、遊びへの思いも深まっていく。幼児が劇遊びの中で試行錯誤する姿を具体的に知らせ、幼児の成長を実感してもらえる機会としていく。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

(ねらいや内容の妥当性)

- ・一人一人が物の性質や仕組みなどに関心をもって考えたり試したりすることを楽しめるようにするとともに、友達と考えを伝え合うことでさらに自分の考えを広げたり深めたりすることを経験していけるように、翌日以降のねらいを設定していく。(事例2)

(環境の構成)

- ・自分なりの船のイメージを多様に表現していけるように、牛乳パック、発泡トレイの他にも様々な素材を準備する。(事例1)

(指導の方向性)

- ・海の波が完成したことで、他の幼児も劇遊びに必要なものに気が付き、作りたいという思いをもって取り組み始めることが予想される。自分たちで必要なものを考えて、目的に向かって考えたり試したりしながらじっくりと作ったり準備したりすることを経験できるように、場や時間を保障したり素材を準備したりする。(事例3)

(2) 長期の指導計画の改善

- ・それぞれの遊具、用具、素材を生かし、幼児が物の性質や仕組みに関心をもてるような環境を計画的に構成していく。(事例1、2)
- ・園内の様々な環境(遊具、用具、素材、場等)が有効に活用されているかという観点で、指導計画を見直す。
- ・自分なりに考えたり試したりすることとともに、その考えたり試したりしたことを友達と伝え合ったり共有したりすることが、発達段階に合わせて経験できる指導計画になっているかを、ねらいや内容、教師の指導の方向性を中心に再考する。

第8節 言葉に対する感覚を豊かにする

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つに「言葉による伝え合い」が挙げられ、具体的な姿が示された。このことは、社会性や道徳性を育む上で重要であり、人間関係の基盤となる。また、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりすることは、他者と協力していくために不可欠である。

近年、情報機器の急激な発達や人との関わりの希薄さから、子供のコミュニケーションが不足していると言われている。自分のして欲しいことを自ら言葉で伝えることができる幼児、身振り手振りで伝えようとする幼児、声を掛けられるのを待っている幼児など様々な姿があり、言葉の理解や、表現方法には個人差が大きい。

この時期の幼児にとって、自分の話す言葉に対し、周囲の大人や友達が、うなずきながら聞いたり、共感したりする姿を見て、話すことの嬉しさを味わう経験が大切である。友達と一緒に遊びたい気持ちが、友達の話を聞こうとする意欲となり、聞く態度も身に付いていく。また絵本を見たり、素話を聞いたりする中でイメージを広げ、いろいろな言葉を知り、聞く力・話す力の育成につながっていく。

ここでは、3年保育5歳児の具体的な実践事例として、友達と絵本を通して言葉の面白さを感じている姿（事例1「今度は違うのを見つけよう」）、友達の話に耳を傾け相手に伝わるように話そうとする姿（事例2「ドキドキでウキウキだね」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P76～79）

1 幼児の実態（3年保育5歳児クラス 25名）

幼稚園に入園した頃は、「先生、これ読んで」と自分の好きな絵本を持ってきて、繰り返し読んでもらうことを喜んでいた。「びろーん」「どてっ」など、気に入った言葉を真似して言いながら手足を伸ばしたり、「どてっ」と転がったりして全身で表現していた。

4歳児になると、繰り返す言葉の響きやリズムを感じながら絵本を見たり、主人公になりきってごっこ遊びをしたりしていた。「私と『い』が一緒だね」と名前に同じ文字が入っていることに気付いたり、いろいろな言葉を思い浮かべ、友達としりとり遊びを行ったりしていた。

5歳児になると、絵本の中に出てくる言葉に関心をもち、初めて耳にした言葉の意味を質問してくることも多くなった。また、自分の名前を逆さから言ったり、「私は何でしょう」とクイズやなぞなぞを友達と出し合ったりしていた。

心動かされる共通の体験や日常生活経験を繰り返し積み重ねていきながら、言葉に対する感覚が豊かになるように援助していきたい。

2 指導のねらい

- ・いろいろな言葉のやりとりや、言葉を使って遊ぶ楽しさを味わう。
- ・人の話をよく聞き、相手の思いや考えを理解しようとする。
- ・互いに意見を出し合ったり、受け入れたりしながら遊びを進めていく楽しさを味わ

う。

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (9)「言葉による伝え合い」]

- ・遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (8)「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」]

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (3)「協同性」]

4 内容

- ・友達と一緒に、言葉の楽しさを感じながらいろいろな言葉遊びをする。
(事例1・2)
- ・人の話をしっかり聞き、思ったこと、考えたことを相手に分かるように話す。
(事例1・2)
- ・友達の思いを感じたり、受け止めたりしながら遊びを進めていく。(事例1・2)

5 環境構成のポイント

- ・幼児の興味、関心のある絵本を選んで保育室などに設置する。(事例1)
- ・なぞなぞ、しりとり、言葉集めなど、いろいろな言葉遊びを伝え、時にクラス全体で楽しむ時間を作る。(事例1、2)
- ・幼児が遊びの中で言葉に親しめるような、しりとり遊び、仲間集め遊び、文字遊びなど、環境を設定する。(事例2)
- ・幼児がじっくり遊びに取り組み、友達との関わりを楽しめる空間や時間を確保する。
(事例1、2)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 今度は違うのを見つけよう(6月上旬)

絵本を見ながら「かっぱかっぱ…ぱかっぱかっ…」と言っている二人。

A児「ぱかっぱかっ、かっぱが馬に変身するんだよね。」

B児「時計は何に変身するか知ってる？」

C児「とけいとけい…けいと？毛糸だ。」

幼児が繰り返し読んでいたので、クラスで集まった時に読み聞かせを行った。「たけがどうくつにはいると…」「たけたけ…けたけた～。」「りんごは、りんごりんご…ごりん。」「ごりん?」「次は何が出てくるのかな?」と興味津々で、言葉を繰り返

し言いながら絵本を楽しんでいた。

食後、C児が「スープスープ…ぷすーぷすーって面白い！くちはちくちく、くちはちくちく。」と

印象に残った場面を口ずさんでいた。

A児「いすは…いすいす…すいすい スイスイ…
プールだ。」

B児「じゃあ、たいは？ たいたい…いたいた
痛いよう。」

C児「痛い？いたいたって、『居た』のことだと思った。」

教師「そうか、先生は『板』かなって思ったよ。」

A児「へえ、みんな違ったんだね。」

教師「そうだね、いろいろな『いた』があるんだね。」

その様子を見て、周りにいた幼児も集まり、D児が「ぞうきんぞうきん…きんぞう？人の名前みたいだね。」と言うと、「ぞうきんキンキン！」とE児。F児は「ぞうきんキンキンか～、いすはスイスイ、すいかもスイスイ。」と音の響きに関心が向いた。F児に刺激を受け、「りんごはリンリン。」「うどんはドンドン。」「カーテン、テンテン。」「ぶらんこランラン。」などたくさんの言葉が聞かれ、「今度は違うのを見つけよう！」と言葉遊びが続いた。



○事例1に対する評価

(環境の構成)

5歳児になると、言葉を繰り返していくことで違う意味の言葉に変化する、という遊びを楽しめるようになる。クラス全員で同じ絵本を見る機会を作ったり、発達に応じた絵本、幼児が関心をもっている絵本を保育室のコーナーに用意したりし、いつでも見られる環境を設定した。そのことで、絵本の面白さを友達と共有し、一つの言葉からイメージを膨らませ、表現したり、想像したりする楽しさを感じることに繋がった。

(幼児理解、教師の援助)

幼児は、言葉を繰り返して違う言葉になることを見つけることだけでなく、『すいすい』や『りんりん』など、意味はないが音の響きの面白さに気付き、考え始めた。また、同じ音でも、意味が違うものがあることに気付く姿もあった。自分で言葉を見つけて友達に伝えている幼児、友達の言葉を聞いて、同じように声に出している幼児など、様々だが、一人一人の表現を認め、友達の言葉に気付けるように関わっていくことで、いろいろな言葉に触れることができた。

(家庭との連携)

園で読んだ絵本、幼児が興味をもち好んで見ている絵本をクラス便りなどで紹介していくことで、家庭でも内容について話したり、親子で楽しさを共有したりすることができた。また、保護者の方も絵本の大切さを感じ、いろいろな絵本に関心をもつようになり、図書館に行って絵本を借りたり、子供が寝る前に読み聞かせをしたりなど、親子で絵本に触れる機会が増えた。

(2) 事例2 ドキドキでウキウキだね (1月中旬)

ひらがなの文字をパネル布に貼り、初めに『あ』のつく言葉を順番に言っていた。
「あひる」「あいす」「あめ」「あまもり」「あさがお」「あじさい」「あり」「アルパカ」
D児「いっぱいあるね、じゃあ、次は…『ど』にしよう！どんぶり。」

E児「どんぐり。」

F児「ドア、次はGちゃんの番だよ。」

G児「ど？」

F児「ヒントね、ほら穴が開いていて丸くて食べられる物。」

G児「あ、ドーナツかな。」

F児「大正解。もうないかな。」

D児「まだあるよ。ドキドキ！」

F児「ドキドキ…か、『ど』がつくね。」

D児「昨日の夜、急に電気が消えちゃったからドキドキしたんだ。」

E児「私も怖い夢見たときにドキドキした。」

教師「ドキドキすることってあるよね。ドキドキを見つけるのも面白いね。」

降園前に4人の話をし、「どんな時にドキドキする？」と投げかけた。

H児「病院で注射をするのかな？って思う時。」

I児「誕生会の日、みんなの前で名前を言う時、ちょっとドキドキした。」

J児「サンタさん、プレゼント持ってきてくれるかな？ってドキドキした。」

教師「なるほど、心配な時じゃなくて、楽しみな時にもドキドキするよね。」

K児「僕は、ドッジボールでL君がボールを持った時。L君強いから。」

F児「わたしは運動会かな？Gちゃんにバトン渡したよね。」

G児「私も！リレーの時、抜かされちゃうかなってドキドキした。」

その言葉に、他の幼児も「うんうん、リレーはドキドキだったよね。」と共感した。

「でもさ、勝てたからウキウキだったよね。」と言う

L児の言葉に「私も嬉しくてウキウキだったかな。」

「僕は、ドキドキだな。」「そうそう、ドキドキでウキウキだね。」とみんなで運動会を振り返った。



○事例2に対する評価

(環境の構成)

文字環境の一つとして、ひらがなをパネル布に貼って遊べるように設定すると、幼児は文字を並べてしりとり遊びや、初めに○がつく言葉遊びをしていた。この時期、学校への関心も高まっていたので、壁につけて掲示すると、黒板に見立てて遊びが盛り上がった。また、廊下のスペースを利用したことで、年長だけでなくいろいろな学年の幼児が集まり、言葉の刺激を受けたり、年少・年中児に対して「これは『あ』だよ。」と教えたりして一緒に遊べる場となった。

(幼児理解、教師の援助)

G児は、思いを積極的に話すタイプではないが、運動会でドキドキした話をみ

んなが共感してくれたことで自分の話す言葉に自信をもち、堂々と話すことができた。

D児の「ドキドキ」という名詞ではない言葉に、周りの幼児は少し戸惑いを感じる部分もあったが、「電気が消えてドキドキした。」という体験を聞いて、自分のドキドキした思いを伝え合う姿につながった。幼児の『ドキドキした経験』を受け止め、『ドキドキする時はどんな時だろう』とクラス全体に投げかけたことで、自分なりに考えたり、友達と探そうとしたりして、いろいろな場面が出てきた。そして、心配する時だけでなく、楽しいことを期待する時にもドキドキするという気持ちの違いを感じることができた。

(家庭との連携)

子供たちの言葉のやりとりやつぶやきなどを、クラス便りに掲載し、思いや考えを自分の言葉で伝えることの大切さを知らせてきた。また、学級懇談会で「言葉に対する感覚を豊かにする」ことを話題に出し、簡単な単語のみで親子の会話をするのではなく、いろいろな言葉に触れながら会話が楽しめるように投げかけた。

保護者の方も、状況に応じた言葉を使ったり、正しい言葉で話したりするなど、『言葉』に対しての意識が変わってきた。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

教師がそれぞれの表現を受け止め、共感・共有すること、幼児の言葉をつなぎ、表現することの楽しさを味わえるように様々な言葉遊びを取り入れていく。また、幼児が日々の生活の中で聞き慣れない言葉を、意図的に発信していく。幼児が「どういう意味だろう」と不思議に思った言葉の意味を一緒に考えたり、状況に応じた正しい言葉遣いを伝えたりし、絵本や詩の中に出てくる多様な言葉を生活体験と結び付けられるようにしていく。

(2) 長期の指導計画の改善

教師が保育の中で言葉遊びを意図的・計画的に取り入れ、年齢に応じた言葉の獲得ができるような絵本・素話等の選定を再考していく。言葉に対する興味関心を高め、音の響きや面白さを知るきっかけとなった場面を一部の幼児だけでなく、クラス全体に広がるような機会を作っていく。また、耳からの情報だけでなく、文字を通して言葉の感覚を豊かにできるよう、黒板やカレンダーを活用したり、表現の楽しさ・面白さを味わえるような詩を幼児の目に触れやすい場に掲示したりしていく。

第9節 身近な環境との関わりの中で様々に表現する

幼児の感性や自己表現は、自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる。幼稚園において、日常の中の事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを友達や教師と共有し、表現することが大切である。

また、幼児が個々の思いや考えに基づいた表現の仕方を教師が気付くことを大切にしていけることが重要である。

ここでは、2年、3年保育混合クラス・5歳児の指導実践事例として、廃材の特徴を生かして様々に表現する姿（事例1「つくった魚、釣れたぞ、魚」）、お店屋さんごっこで他の幼児の意見を取り入れ、友達と協力して表現する姿（事例2「あかぐみ水産開店しました」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P80～P83）

1 幼児の実態（2年、3年保育混合 5歳児クラス 25名）

進級して1ヶ月が経ち、新しいクラスにも慣れてきた。また、今までの生活や園での出来事を通じて、自分のイメージを他の友達と共有し、表現していけるようになってきている。

5月に入り、保護者の協力により、家庭にある廃材を集め、各自で製作に取りかかれる環境を作った。自分一人で作り、表現することを楽しむだけでなく、お互いに協力したり、製作の案を出し合ったりする姿が見られ、友達と楽しく製作に取り組んでいる。

身近な廃材等を、遊びに生かすことにより、様々な物との関わりを楽しみ、興味や関心を深めていけるようにしたい。

2 指導のねらい

- ・様々な形や素材である廃材の特徴を生かし、自ら考え、表現しようとする。（事例1）
- ・自身の考えだけでなく、他の考えを取り入れ、友達と協力して表現する。（事例2）

3 指導を行う際に主に考慮する幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（10） 豊かな感性と表現]

4 内容

- ・身近にある様々な廃材を利用し、工夫して遊ぶ。（事例1）
- ・自分のイメージを友達と共有し、工夫したり協力したりして製作する。（事例2）

5 環境構成のポイント

- ・牛乳パック、乳酸飲料の空容器、BOXティッシュやお菓子の空箱などを保護者より提供してもらい、登園後や昼食後の時間などに各自が自由に使用し、廃材で製作を行えるようにする。(事例1)
- ・家庭から提供された廃材だけでなく、幼児たちから出たアイデアに沿うような教材や教師が必要になると想像した教材を用意し、廃材製作で使えるように準備しておく。(事例2)
- ・幼児が魚等に興味をもてるよう図鑑を用意したり、屋台の雰囲気や伝えたりする。(事例2)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1「つくった魚、釣れたぞ、魚」(5月中旬)

廃材を利用し、自分のイメージに沿ったものを製作し、家へ持ち帰る姿が見られる。自分だけの製作から徐々に複数の幼児での製作になってきている中、乳酸飲料の空ケースや変わった形の箱を動物や魚に見立てて製作したり、箱同士を繋ぎ、大きな製作物を作ったりするようになってきた。またその一方で広告紙や新聞紙を丸め、剣を作るような姿が見られる。(園では「くるくる棒」と呼ぶことが多い)

A児「乳酸飲料の形ってお魚見たいだね。見て見て。」

教師「本当だ。口を開けているみたい。」

B児「僕は、本を見ながらお菓子の箱をくっつけて、大きな魚を作ったよ。」

教師「ずいぶんたくさんのお魚ができたね。大きいものや面白い形の魚がいるね。」

A児「たくさん作ったから、魚釣りしたい。」

教師「魚を釣るのに道具は何だろう。」

A児「釣り竿。どうやればいいのかね。」

C児「この剣、釣り竿みたい。」

教師「くるくる棒に糸と針をつければ釣り竿ができるね。」

C児「僕も入れて。棒を作るのを手伝ってあげる。」

A児、B児を中心に魚を作る幼児は、食べたことのある魚や知っている魚の名前をあげ、たくさん種類や形のものを作り始めた。また、くるくる棒を作る幼児たちは、紙を丸めたり、テープを貼ったりなど、作ることを分担し、協力しながら、魚釣りへの準備が始まり、遊びが発展していった。

○事例1に対する評価

(幼児理解)

食品やお菓子の空き箱、乳酸飲料の空容器、新聞紙や広告紙など身近にあるものを使い、幼児自身のイメージを膨らませながら、製作に取り組んでいる姿が見られる。乳酸飲料の容器から魚をイメージし、空き箱の形や大きさ、材質などに興味をもち、魚の形に近づけるのはどうすればよいか考えている姿がある。特にくるくる棒を作る際には、紙を押さえながらテープを貼るなど、複数の動きが必要になるが、友達と一緒にいることで、一人は押さえる、もう一人がテープを貼るといったような役割の分担ができて、作りやすくなるなど、協力して活動する姿

が見られた。

(教師の指導、家庭との連携)

教師は、様々な廃材を用意し、紙の種類の違いやプラスチックなど特性の違いを知らせ、製作に関わっていった。魚が登場する絵本や、図鑑を用意するなど、魚の製作へのイメージが膨らむようにしていった。

幼児は迎えに来た保護者に早速見せ、どのように製作したか伝える姿が見られた。園だよりや保護者との会話の中で、幼児が何をどうイメージして、製作したか伝え、家庭でも引き続き作り、遊べるように幼児の姿を共有していった。

(2) 事例2 「〇〇ぐみ水産開店しました」(6月中旬)

廃材を利用した魚作り、釣り竿作りを通して、魚つりが毎日のように行われるようになってきた。その中で、実際調理をして食べる、クッキーづくりの調理活動があったあとは、魚釣りとままごとが結び付いていった。

D児「今日はまぐろとサーモンが釣れました。」

E児「サーモンを小さく切って。」

教師「どんな料理がありますか？」

D児「ここはレストランじゃありません、お寿司屋さんです。」

教師は他の遊びをしていた幼児たちと一緒にお寿司の絵本を見ながら、注文していった。

F児「先生、お寿司屋さんって名前じゃなくて、あかぐみ水産がいい。」

教師「あかぐみ水産って何屋さんなの。」

F児「魚が泳いでいて、タコやイカ、貝をいっぱい売っているところ。」

その後、幼児達は、あかぐみ水産と命名されたお店の準備をしていった。教師はお祭りの話を引き合いに出し、どのような屋台があるのか、何を売っているのか幼児たちと話をしていく。

F児「先生、自分で魚を釣って食べたことがある。」

D児「イカが棒にささってるのを、この前食べたよ。」

教師「いいね。色々なお店があるね。知っている料理をみんなで作ってみようか。」

幼児たちがそれぞれ知っている料理のイメージを取り入れ、釣った魚を料理し、様々な料理を提供するお店屋さんごっこが始まっていった。

幼児達「いらっしゃいませえ。魚を釣ってください。釣ったものを焼きます。」

G児「ホタテ、ください。」

D児「今焼けます。熱いですよ。」

釣り堀から、魚を釣り、お店の人に渡すこと、お店の人は鉄板の上で焼き、トングを使ってひっくり返す、お皿に盛り付けるなどの沢山のアイデアを取り入れていった。

大きなお店になったことにより、クラス全体や他のクラスの幼児をも巻き込んだお店屋さんごっこになっていった。

○事例2に対する評価

(幼児理解)

実際に行った調理活動を通して、魚釣りだけの遊びから魚を調理することを含めた遊びに変化した。また、お店の名前を決めたことにより、あかぐみ水産とい

う浜焼きのお店に変わっていった。魚から連想されるお店がお寿司屋さんということだけでなく、もっと幅広く今までの色々な経験で得た〇〇水産というお店であった。お寿司に限定しない名前を決めたことにより、幼児たちの様々なイメージ、表現が引き出された。

(教師の指導)

お店屋さんごっこでは、寿司屋さんなどに落ち着くことを考えていたが、想像を超えて、あかぐみ水産という形になった。遊びや表現が教師の考えを超えてきた中で、幼児たちの話を捉えて、生け簀のあるお店や串に刺してあるイカ焼きなど、印象深いものをお店屋さんごっこにうまく取り入れて、対応していくことができたと考えられる。普段の会話の特徴的なものを捉えて、話をしていくことの必要性を感じることができた。幼児たちの身近な環境にあった出来事を踏まえ、遊びを広げていくことにつながった。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

幼児一人一人が興味関心をもっているものを膨らませられるよう環境を整え、自己表現ができるよう手触りや色、柔らかさが違う様々なものを準備しておく。また、他の幼児が興味関心をもてるよう、全体で取り組めるよう教師の声かけなどにより、幼児の興味が向くように促していく。そのために絵本や紙芝居の読み聞かせや素話などを取り入れていく。

(2) 長期の指導計画の改善

幼児は自分で触れる、感じる、表現するなどを繰り返すことでイメージを広げて、表現方法を得ていく。そのため、幼児と幼児、教師と幼児など幼児の発する言葉を捉え、また幼児がどこで遊び、作り、見付け、興味をもつ、などの一人一人の行動に目を配り、特徴のある出来事を拾っていけるか、教師の力量が問われる。その中で、幼児が興味を示すような教材、材料、環境、天気などを教師が自身で体験し、気付ける経験をしていくことが必要である。また、幼児が気付いたこと、感じたことを見守りながら、幼児が表現しようとする小さな動作に気付くことができること、共感できることが大切である。

第1節 小学校教育につなぐ（小学校教育との連携・接続）

幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

【幼稚園教育要領 第1章 第3 5 (2)】

幼稚園と小学校における生活の変化に、幼児が対応できるようになっていくことも学びの一つとして捉え、教師は適切な指導を行うことが必要である。

幼児の発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。すなわち、幼児の発達を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深められるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究会や研修会、保育参観や授業参観などの連携を図るようにすることが求められている。

ここでは、幼児と児童の交流活動を含め、園や学校での体制等の実践事例を紹介する。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P109～P113）

1 園における取組

本園はA小学校と隣接し、幼児は毎日校庭の一部を歩いて幼稚園に登園している。小学生の生活する姿を見ながら生活しているので、幼児は小学校に親近感をもっている。幼児・児童間の交流では以下の表の活動を行っている。また、日頃から校庭等を使用して、散歩や校庭めぐり、運動会やその練習を行ったり、「親子プレイデー」で体育館を使用したりするなど、小学校の施設を共有している。また、幼稚園の運動会に小学校のマーチングバンドが参加する機会も設定している。

2 年間指導計画

本園の幼児はA校ではなく他の小学校に入学する幼児もいる。他校へ入学する幼児にとっては、交流の機会が「小学校ってこういうもの」という大きな理解となり、「自分の入学する学校はどんなところだろう？」という楽しみにもつながる。また、交流する小学校へ入学する幼児にとっては、これからここに仲間入りするのだという気持ちをもって経験することで、進学への思いをさらに高めることができる。双方ともに、入学前の期待を高め「学校が楽しみ」と実感できる大きな役割をもっている。

また、交流の機会は幼児や教師の学びの場となるだけではない。幼児の姿や小学生との関わり・活動を具体的に伝えることで、幼児の保護者にとっても、学校への安心感をもち、就学に対する心構えや幼児の今の育ちを確かめ合っていく機会ともなっている。

＜幼児・児童間の交流＞

| 実施月 | 活 動 | 交流学年 |
|-----|------------------------------------|------------|
| 10月 | 生活科「たのしいあきいっぱい」公園へのどんぐり拾い (2時限) | 5歳児・1年生 |
| 11月 | 学校まつり | 5歳児・1～6年生 |
| 11月 | 生活科「どんぐりまつり」(2時限) | 5歳児・1年生 |
| 11月 | 給食体験 | 5歳児・5年生 |
| 2月 | 授業参観 | 5歳児・1年生 |
| 通年 | 図書委員による読み聞かせ(年間7回) | 4・5歳児・図書委員 |
| 通年 | 学校タイムに参加(縦割り活動・年間11回中9回参加) | 5歳児・1～6年生 |

＜教師間の連携＞

| | | |
|-----|-------------------|------------------|
| 5月 | 顔合わせ・年間計画について話し合い | 幼稚園全職員・1年担任・担当職員 |
| 6月 | 1年生の授業参観・話し合い | 昨年度年長組担任・1年担任 |
| 10月 | 公園下見・打ち合わせ | 5歳児担任・1年担任・保育所担任 |
| 1月 | 幼小連絡会 | 5歳児担任・担当職員 |

交流・連携に当たっては、教師間の話し合いが重要である。定期的に行っているものとしては上記のものがある他、交流の前後で必要に応じて打ち合わせを行っている。

3 活動の展開と評価

(1) 事例1 1年生とどんぐり拾いに行こう！どんぐりまつりを楽しもう！

○幼稚園のねらい・内容

[5歳児]「1年生とどんぐり拾い」

(ねらい)

- ・身近な自然に親しみ、触れ合う中で、様々な事象に興味や関心を持つ。

(内容)

- ・秋の自然に触れながら散策し、どんぐり拾いを楽しむ。

※幼小交流のねらい

- ・1年生と一緒に活動する楽しさを味わい、小学校生活への期待感をもつ。

○小学校の目標

[1学年] 「たのしいあきいっぱい」(生活科)

(生活科の目標)

- ・諸感覚を使って、身近な秋の自然を観察したり、木の実を集めたり、自然を利用して遊んだりするなど、秋の自然に関心をもって秋と関わる中で、夏の頃と様子が変わっていることに気付くことができる。

※幼小交流のねらい

- ・幼稚園の幼児との触れ合いを通じて、下級生との関わりを楽しみ、思いやりの心を育む。

[事前打ち合わせ]

小学校の1学年の担任教師と幼稚園と保育所の5歳児担任が集まり、当日のめあてや日程を確認した上で、公園へ下見に行く。

現地で安全面を確認するとともに、散策ルートや約束を決める。また、幼児・児童の予想される行動を伝え合い、配慮事項について確認する。

[事前準備・活動]

1学年担任は、幼児教育施設からの情報をもとに、グループ編成を行う。

1年生は、同じグループの幼児のために、ワッペンを作る。

[実践]

○どんぐり拾い

小学校の校庭に1年生と幼稚園児・保育所児が集まり、それぞれの先生の紹介・グループ顔合わせを行う。次にめあての「仲良く安全に歩こう。どんぐりをたくさん拾おう。」を聞く。

予め決めていたペアになり、1年生が用意したワッペンを幼児に付け、手をつないで公園へ出発する。

歩きながら、「担任の〇〇先生はね・・・。」と児童から学校の様子を話したり「好きな食べ物なあに？」などと幼児から聞いたりする姿が見られる。

公園では、どんぐりや落ち葉をペアで一緒に拾う。2人で一緒に足を進める姿や、見つけたどんぐりに向かって急に走り出す幼児の動きに合わせて、1年生が走る姿などがある。また、拾ったどんぐりの多さや見つけた虫などを、教師たちにも見せたい思いから、幼児は積極的に教師に関わっている。

学校に戻り、めあての確認をした上で、次の活動は「どんぐりまつり」であることを聞き、解散する。

「どんぐりまつり」では、1年生が、グループでお店やゲームコーナーを開き、幼児を招待する。その準備のため、拾ってきたどんぐりで、おもちゃや飾りなどを作る。

○どんぐりまつり

「どんぐりまつり」当日、幼児が小学校へ行くと、児童から「〇〇くん！」と幼児に声を掛けたり、幼児からお世話になった1年生に手を振ったりと、再会を喜ぶ姿がある。

1年生3クラスを全て回ることができるよう、時間を区切ってそれぞれの遊びを楽しむ。1年生がルール説明をしたり並ばせたりすることを、幼児がよく聞き、行動する姿が見られる。自分の好みのコーナーでは、何度も繰り返して楽しむ姿もあった。

やじろべえやけん玉など、少しコツが必要な遊びで幼児が試行錯誤している姿が

あると、「こうやるんだよ。」と1年生がやって見せるなどして教えている。

終わりの集まりでは、幼稚園・保育所の代表の幼児が、楽しかったことやお礼の気持ちを伝える。代表の幼児は、多くの児童や幼児の前で少し緊張しながらも大きな声で話し、クラスの幼児は代表の幼児が前で話すことを笑顔でうなずきながら聞いている。

○事例1に対する評価

<ねらいや内容の妥当性について>

[5歳児]

幼児は、公園で1年生と手をつないで散歩したり、自然との関わりをもちながら一緒にどんぐり拾いをしたりする姿、小学生の話をよく聞いている姿等から、小学生と関わることを楽しんでおり、ねらいを達成していると考えられる。また、1年生と一緒に活動することで、どんぐり拾いそのものへの意欲の持続が感じられた。

また、1年生が作ったワッペンを幼児に付けたことで、幼児は安心感や1年生への親しみ、活動への期待感をもって散歩をスタートすることができた。幼児は児童と一緒に過ごす中で、1年生への親しみや憧れの気持ちを高めている様子が見られた。

さらに小学校での楽しい活動を経験し、「小学校は楽しい！」と、入学への期待を高めることができた。

[1学年]

児童は、以前に公園に来た頃と自然の様子が違うことに気付き、秋の姿を知ったり感じたりしている。年下の幼児と接することで、相手の姿に気付き足並みを合わせ、どんぐりを入れた袋を縛る手伝いをしたりするなど、思いやりの気持ちが見られた。また、自分たちよりも幼い相手に接することで、どうすれば自分の思いが伝わるかを考えながら、話したり行動したりできたと考える。

幼稚園でこの経験をした児童は、自分たちが幼児を迎えたときに活動そのものをイメージできるとともに、1年生と関わった経験から自分がすべきことが分かり、幼児との関わりが深くなる。どんぐりまつりの遊びのコーナーを決める際には、教科書に載っていない、前年度に体験した遊びを提案する姿もあり、体験が生かされている。

<幼小連携・接続の視点>

教職員で下見をする際に、「幼児にはこんな姿が見られそうだ。」「1年生はこんな姿だろう。」と、それぞれの育ちを伝えながら、実際の場で活動を考えることによって、それぞれの姿に合った配慮が明確となった。事前打ち合わせを行い、幼児・児童理解を共に行うことの重要性を改めて感じた。

また、小学校の教師は、幼児が教師の指示によって、スムーズに並んだり話を聞いたりする姿、集団で活動する姿、代表の幼児が感想を発表する姿等を見ることによって、5歳児の育ちを理解することができた。幼稚園の教師は、生活科での教育内容や指導方法を知るとともに、この時期の1年生の発達の様子や卒園した児童のその後の育ちを知ることができた。

(2) 事例2 給食おいしかったね！

○ 5歳児のねらい

小学校の雰囲気を感じながら給食を味わい、就学を期待する。

○ 5年生のねらい

幼児と関わることで、自分たちより幼い相手にやさしく接する態度を養う。また、1年生として入学してくる幼児と親しくなることで、最高学年としての責任感を育む。

[活動設定の理由]

本園では、毎日お弁当持参である。幼児は、親子共に「給食を食べられるだろうか?」「どんなものなのだろうか?」と不安を感じる姿も多い。小学生と同じ給食を食べることで給食への不安を軽減させたいと考え、幼稚園から依頼して給食体験を毎年実施している。

5年生は、幼児が入学時に最高学年となる学年であり、入学後に関わりが多いことを考慮して5年生との会食とした。

[実践]

○ 5年生と給食体験

クラスの幼児が、5年生3クラスに分かれて体験する。児童の1グループに1人から2人の幼児が入る。テーブルクロスや箸セットの置き方など、幼児にとっては初めての作業なので支度にとまどっていると、5年生が一つ一つ丁寧に教えたり、うまく理解ができない様子の幼児には手伝ったりする姿がある。給食を配膳する姿を、幼児は興味深く見ている。

準備ができ、「いただきます」の合図ですぐに食べ始める幼児もいれば、なかなか食べ始められない幼児もいる。5年生が「嫌いなもの?無理しなくて大丈夫だよ。」「おかわりする?」など声を掛けてくれたり、牛乳パックの片付け方を教えてくれたりする。また、幼児をリラックスさせようと、楽しい話題を提供する姿もある。

幼児は、給食を体験することで「全部食べられた」と自信をもったり「少し牛乳飲めた。」と不安を軽減したり「アジフライ美味しかった」と新たな発見をする姿が見られた。さらに「牛乳は嫌いだけど、次も飲めるかも」「少しだったら飲めるよ」と苦手な牛乳に対しても前向きな言葉もでていた。

小学生と同じ体験ができた嬉しさや自信から、「アジフライ美味しかったから、お弁当に入れて!」と母に頼むなど、給食体験を家庭に伝える幼児もいた。

○ 事例2に対する評価

<ねらいや内容の妥当性について>

実際に教室で小学生と給食を食べる体験をして、給食の流れや時間を体感でき、雰囲気を味わえたことで、それまでの給食への不安が減少している様子が見られ、十分にねらいを達成していると言える。

児童は、それぞれの幼児の様子に合わせて必要な関わりや手助けをしており、優しく接していた。各々が楽しそうに幼児と関わっている様子から、仕事としてだけではなく、関わりを心から楽しんで行っていることが伺えた。児童が幼

児の姿から思いを察し、言葉を掛けたり手助けしたりしていることを教師が認めることで、自分が幼児の役に立っているという気持ちをもつことができる。さらに、幼児が入学した後もお世話をしようと思えるきっかけともなる。

<家庭との連携>

幼稚園の保護者は、給食を我が子が食べられるのか、また、食べられたとしてもどの程度食べられるかなどの心配が尽きない。そこで、当日の様子を具体的に伝え、小学校入学にあたっての、食に関する課題や今後経験しておくべきことを家庭で考える機会をもつように図った。給食体験後には、お弁当の栄養や食感などを見直して改善したり、子供の楽しかった思いを再現するためにメニューを工夫したりした家庭もあった。

(3) 事例3 幼小連携・接続に向けての幼稚園・学校の取組

[実践]小学校における授業参観

○ねらい

- ・入学当初の児童の様子や教育内容を理解する。
- ・児童の個々の育ちや課題について、考察する。

○取組

6月に、近隣の幼稚園や保育所等の教師や保育士が1年生の授業を参観する。

○参観後の協議

参観後、児童が下校し、小学校の担任と、参加した幼稚園や保育所の教師等で話合いの時間をもつ。小学校の担任が、入学からこれまでの1年生の様子を伝え、幼稚園や保育所の教師等は、参観しての感想を伝える。また、全体会の後、現担任と元担任で、個々の児童についての情報交換を行う。

○事例3に対する評価

幼稚園の教師は、入学後数か月経った時期の児童の姿を参観することにより、卒園児が、小学校での生活の変化にどれだけ適応できているか、幼稚園で身に付けた力がどのように活かされているか等を見届けることができる。

また、小学校の生活や指導の方法などの実態を知ることによって、小学校の生活に適応できるような指導や配慮について考え、特に就学を控えた時期の指導を再確認し、指導計画を見直す機会となる。

小学校の教師は、幼稚園の元担任と話し合うことで児童の様子や発達が理解できたり、配慮事項や保護者との連携のヒントが得られたりする。

参観後の協議では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、参観のポイントを設定するなどして、より具体的に接続期の教育を教職員で考えることが必要である。

4 評価を踏まえた改善に向けて

(交流活動等改善に向けて配慮する事項)

- ・「どんぐりまつり」や「給食体験」での幼児の姿や活動を通しての学びを、園内の反省に留めず、小学校の先生方に伝えて、共通理解を図る。

- ・ 幼児にとって、就学を期待する大きな機会となっていることや、交流することで意識や行動が育つ大切な場面であること、保護者にも大きな刺激となっていること等をしっかりと小学校に伝え、毎年実施できるよう働きかけ、カリキュラムに位置付ける。

（接続を踏まえた指導計画の改善の視点）

- ・ 幼稚園の教師は幼児の交流の場における姿について把握しているが、小学校は低学年の担任を中心に交流活動を行うので、他学年の教師は幼稚園等における幼児の姿や保育を実際に見ていないことが多い。そのため、次の1学年担任にも分かりやすいよう、書面等での記録の残し方にも配慮する必要がある。また、ねらいや内容を再考し、次年度の指導計画の改善を行い、実践につなぐようにすることが必要である。
- ・ 交流活動等の実践後、事後の反省等年度末まで持ち越してしまったり書面で簡素化してしまったりすることもある。互いに気付いたことを伝え合うことで、次年度のよりよいプランが考えられるので、振り返りやカリキュラムの見直しの時間を年間計画に位置付けておくことが重要である。

5 まとめ（連携から接続へ）

本園でも、小学校との交流活動が位置付けられ、教員の交流も増え、互いの教育について考える機会も増えてきている。しかし、教育の接続、学びの連続性について考える場はまだ少ないことが実状である。

子供の学びをつなぐためには、保育参観や授業参観を通じて、教師同士がお互いの教育内容等について相互に理解できるよう研修をするなどして、小学校側は、児童の学びの履歴を知り、幼稚園側は、幼児の未来像を知ること、双方の指導に生かしていくことが必要である。

そこで、今後、以下のような具体的な取組を進められるよう計画している

- ①入学当初の授業や給食、そうじの様子を幼稚園教諭が参観する。
- ②幼稚園側が気になった場面を記録し、その児童の様子が、幼稚園時代のどのような指導の延長線上にあるか考察する。
- ③②で考察したものをまとめ、小学校と意見交換する。
- ④入学当初に見られた児童の行動について、幼稚園でどのような経験がもととなっているか、また幼稚園での経験と小学校での学習や生活にどのように影響しているかを整理する。その際には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭において進めていく。
- ⑤幼稚園側は、小学校での生活や学習を意識した幼稚園での保育内容や環境構成のポイントを、小学校側は、幼稚園での経験を踏まえた学校での指導の配慮事項等について、具体的にまとめる。そしてまとめたものを蓄積し、学校、幼稚園の他学年の教職員に広めていく。

以上のような取組を丁寧に行うことにより、幼小の円滑な接続を推進していく。

第2節 特別な配慮を必要とする幼児への指導（特別支援教育）

障害のある幼児などへの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことを配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。また、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関と連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個々の幼児の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。 【幼稚園教育要領 第1章 第5の1】

障害のある幼児の指導に当たっては、園全体の協力体制を充実し、計画的、組織的に取り組むことが重要である。また、教職員が幼児に対する理解を深め、個に応じた様々な手立てを検討し、指導内容や指導方法の工夫を行っていくことが重要である。

ここでは、3年保育3歳児の事例を取り上げ、教職員が幼児の発達と障害への理解を深めながら支援する事例として、幼児が環境の変化に適応していく姿（事例1「すごいね できたね」）学級の友達と関わる姿（事例2「チューリップの歌で楽しいね」）、学級の中で自ら行動する姿（事例3「お砂場大好き」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P105～P108）

1 幼児の実態

(1) 幼児の概要と園での姿

- ・3年保育3歳児クラス（20名）に所属する。
- ・父、母、姉、本人の4人家族である。
- ・手足の筋肉がまだ柔らかいため、歩行が不安定である。
- ・発語が少ないので表情や身振り手振りから、心情等を読み取る必要がある。
- ・言葉による指示が伝わりにくい。
- ・保育時間中は補助教員が付添い、支援している。
- ・外の遊具遊びに興味をもっている。

(2) 園における配慮事項

- ・疲れやすいため、保護者と相談しながら降園時刻を早めたり、行事や活動等の内容によっては参加を見合わせたりしている。
- ・周りの幼児が、適切な関わりができるよう、担任等が関わり方を示す。
- ・保護者の願いにより、友達と関わる場面を意図的に設定し、子供同士のコミュニケーションが行われるように図る。
- ・園で安心して生活できるよう、家庭で興味をもっている遊びに類似した遊びを用意する。
- ・次の日も遊びやすいよう、積み木等の遊具を遊びかけの状態にしておく。

(3) 専門機関との連携

- ・家庭、療育施設と連携し個別の教育支援計画を作成している。

- ・週に2日、療育施設に通っており幼稚園への登園は週に3日程度である。加えて他の療育施設にて月2日訓練を受けている。

2 指導のねらい

(1) 指導の方針

障害の有無に関わらず、「自分とは違う」と感じた友達の特徴を尊重し、同じクラスの一員として共に遊び、時に見守り、必要な手助けをするなど優しい気持ちをもったクラスにしていきたい。また、保育者と共にクラス全員で、Aの成長を含め、自分たちの成長を感じさせ、年中クラスへの期待につなげたい。

また、保護者の願いである、クラスの友達との関わりを大切にし、クラスの全ての子供達が安心できる環境の下で、生活や遊びを共に楽しむことができるようにする。

(2) 事例における指導のねらい

- ・新しい環境での生活の仕方を知り、園生活に慣れる（事例1）
- ・自分の身近な存在を意識する。（事例2）
- ・友達との関わりの楽しさ、一人（家族と）ではできない体験を楽しむ。（事例3）

3 内容

- ・朝の支度の仕方に慣れ、友達と一緒に進んで行く。（事例1）
- ・朝の活動に参加し、友達と活動を楽しむ。（事例2）
- ・砂場遊びを友達との関わりながら楽しむ。（事例3）

4 環境構成

- ・朝の支度等をスムーズに行うことができるよう、一人一人のマークを決め、それぞれのロッカー等にマークのシールを貼ったり、朝の支度の導線を工夫したりする。（事例1）
- ・互いの活動が見え、興味をもつことができるよう、座席の位置を工夫する。（事例2）
- ・朝の活動に、A児が好む歌や手遊びを多く取り入れるようにする。（事例2）
- ・A児がよく遊んでいる砂場に他の幼児も興味をもち、工夫して遊べるように道具を準備しておく。（事例3）

5 活動の展開と評価

(1) 事例1 「すごいね できたね」 5月

A児については、朝の支度を教師と共に一つ一つ、繰り返し行っている。導線や表示の工夫によって、支援員と一緒にいけるようになってきている。

支援員「Aちゃん、タオルを掛けようね。」

支援員が手を添えると、A児はフックにタオルを掛ける。

担任は「上手にできたね、パチパチパチ。」と言いながら拍手をして、できた喜びを表現した。A児は嬉しそうな表情を見せる。

隣にいたB児が「すごいね。できたね。」と言い、教師と同じように拍手をする。A

児も笑顔で拍手をしている。

数日後、A児が登園すると、自らタオルを掛けに行く。

C児「Aちゃん、タオル掛けられたね。」

周りにいた幼児が拍手すると、A児も手を叩いている。

D児「Aちゃん、すごいね。」

C児「次はコップを出そうね。」

D児「あと、連絡帳はこっちだよ。」

A児はカバンからコップと連絡帳を出す。

C児「みんなで出しに行こう。」

数人の幼児がA児と一緒にコップと連絡帳を置きに行く。

教師「みんなも、朝のお支度ができるようになって、すごいね。」

D児「みんな、拍手だね」

みんなで拍手をして、喜んでいる。

○事例1に対する評価

周りの幼児がAを意識し、教師のAへの声掛けをはじめとしたやり取りの様子を模倣して関わったり、認める言葉掛けを行ったりすることで、Aと積極的に関わりをもとうとしてきた。

教師や支援員は、A児が一人でできること、教師が成長の段階を踏まえて支援を行ってできることを家庭と連携して把握し、褒めながらA児が自分で出来る喜びを味わえるよう支援した。

クラス全体では、自分の身の回りの生活に必要な活動を自分でする喜びを味わえるようにした。A児も友達存在を認め、園生活に慣れ、安心して生活していることが伺える。

事例2 「チューリップの歌で楽しいね」 6月

A児やE児は朝の活動の時間は、保育室から出て、ベランダや外で遊んでいることが多く見られた。

6月に入って、E児は朝の活動に参加している他児を遠くから見るようになった。教師が少しずつ、声をかけると少しずつ活動に興味をもつ様子が見られ、徐々に活動に参加するようになる。

A児もまた、落ち着いて座っていることができる時間も長くなり、朝の活動の時間に保育室にいたことが多くなった。

朝の活動で、A児が興味を示しているチューリップの歌を歌う。A児が座ったままの様子を見て、隣にいたF児が声をかける。

F児「Aちゃん、手、チューリップだよ。」

他の子も加わり、両手でチューリップの花を作ってA児に見せる。E児もその輪に加わっている。A児も真似して両手でチューリップを作る。

F児「そうそう。チューリップのお花だよ。」

教師「Fちゃん、Aちゃん、きれいなチューリップありがとう。」

ピアノや歌のリズムに合わせてみんなで体を揺らす。A児も一緒に体を揺らして楽しんでいる。

F児「みんながチューリップになったね。」

G児「みんなきれいだね。」

教師「たくさんゆれていて、楽しそうね。」

これ以降、ピアノに合わせて自然に体を動かす様子が、A児やE児にも多く見られるようになった。

○事例2に対する評価

A児の好きな歌や手遊びをきっかけに、友達からの働き掛けや、友達が楽しそうに活動に参加している姿に刺激を受けたものと思われる。また、活動に参加することで、共に活動する楽しさを感じ、更に活動が広がっている。

この時期になると、A児は友達の行動にも興味を示すようになり、楽しそうな友達の姿を真似て行動できることが少しずつ増えてきている。支援員と担任は、指導の方向性を共有し、見守ること、支援することを共通理解している。

また、教師が幼児一人一人に声をかけ、よさを認めることによって、F児のように、友達の様子に気付き、一緒に楽しもうとする意欲が育っている。

事例3 「お砂場大好き」 10月

A児は支援員に見守られながら、一人で砂場遊びをする姿が多く見られる。砂場で遊んでいたH児らが、A児に気付く。

H児「Aちゃん何作ってるの。」

支援員「何だろうね。」

A児はコップに砂を入れている。その近くで、H児が砂で山を作り始める。

H児「Aちゃん、見て！お山だよ！」

H児が山を作りA児に見せる。A児はその山を見て、手で崩してしまう。

支援員「壊れちゃったね。」

H児「壊れちゃったね。また作るね。」

H児が再び山を作り始める。A児はその様子を見ている。

山が出来上がると、A児が崩す。

H児「Aちゃん、ちょっと待っててね。」

H児が小さな山を作り、出来上がるとA児が崩す作業が繰り返される。

担任が来て声を掛ける。

担任「Aちゃん、楽しそうだね。」

H児「Aちゃん、笑ってるね。」

担任「Hちゃん、大変じゃない？」

H児「楽しいよ。」

また、H児は山を作っている。

○事例3に対する評価

A児は支援員の見守りで、安心して砂場で遊ぶ様子が見られる。クラスの幼児が、A児の活動に無理に関わるのではなく、自然に遊びの輪に入れて遊ぶ様子から、日常

重視すべき項目を視点とした実践

第2章-B 第2節 特別な配慮を必要とする幼児への指導 p.5

の教師の関わり方が影響を与え、互いを尊重する土壌が育っていると考えられる。また、A児を受け入れA児に合った遊びを共に楽しむ様子が伺える。

6 評価を踏まえた指導計画の改善

本事例では、特別な支援を必要とする幼児への、保育者の言葉掛けや関わり方を見て、周りの幼児が真似をして幼児と関わりをもつようになっていった。保育者の行動が周りの幼児に影響を与えていることを自覚し、保育者や療育機関と情報の交換や共有をしていくことで適切な指導や援助のあり方を考えていくことが望まれる。

幼児は周りから自身の行動を認められることで喜びを感じ、更なる行動へと移すことが出来る。一方、場合によっては、行っている行動を止められると、強い拒絶を見せることがある。物事の良し悪しや集団生活のルール等を伝えていく上で難しい部分であるが、幼児の思いを大切にしながら、家庭と連携して少しずつ支援していきたい。